
ビューティフル・ナイト

神狩アイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ビューティフル・ナイト

【Nコード】

N0546Q

【作者名】

神狩アイ

【あらすじ】

大日本共和国の関西南部、紀伊半島沖から七十キロ前後地点、という噂。人口は三百人弱。面積は十四平方キロメートル強。三人にひとりがお年寄り。コンビニもゲーセンもマクドナルドもない。その「水無孤島」は、何千年ものあいだ1日もやむことなく雨が降りつづいていて、スコールにかこまれ本州からの上陸も島からの脱出も不可能な、不思議な謎におおわれた「鎖島」だった。——これは、その島の住人で、神の花と呼ばれる「タカネノハナ」をひっこぬいた兄妹のおはなしです。

1 暴挙

母とミナの帰りを待っていてられる、わけがなかった。

戸棚にプロポーズせんばかりのいきおいで観音扉をひらき、そこに上半身をつつこんで奥にひそんだリングジャムの瓶を右手でつかんだ。ひらいたときと同じ勢いでガラス戸を閉める。全身を全方位から犯す夏の熱波に、僕は牽制するように舌打ちをした。

きらきらと宝石のように輝くリングジャムの瓶をカロリーとあけ、バッグの中につつこんだままの大きなバゲットの袋をとりだした。本土からの物資はやはり少なく、三人暮らしの僕らがもらえたバゲットはたった一本のみである。包丁でみつつに切りわけ、そのうち二つをビニールに戻した。残ったひとつを手でちぎり、スプーンでリングジャムを瓶からすくって、パンにのせてかじった。じんわりと広がる酸味と甘味の絶妙なバランスがたまらない。

本当はリングといえば、皮ごと実じかにかぶりついてやるのがセオリーだと信じている。が、それをかましたのは一度のみである。本土でどれだけ高度な室内栽培がおこなわれていたのやら、一時、大量のリングが水無孤島に送られたことがあった。遺伝子組み換え実験の失敗作ばかりじゃないだろうかと危惧したが、別に人体に異常はなかった。

そのとき僕はまさに運よく輸送の現場を見学してもらえたのだが、吹き飛ばされんばかりの大荒れの天気のほか、無人へりに積みこまれた鉄製の巨大なクーラーボックスの中にあつた大量のリングを見たときは、ミナと一緒に飛びはねて喜んだ。その怒涛のリング攻めを当初はありがたいと思いつつも多少処理に困っていたが、害がないものだと分かると大喜びで均等に配分していった。僕の家に来わつてきたのは八個。半分を加工しよう、ということで母が作ったのがこのジャムだった。他にもパイや煮リングへと変貌を遂げたが、僕はジャムが一番気に入っている。残りのリングはセオリーどおり、

丸かじりしてやった。

もうひと口、とあらたにバゲットをちぎったが、スプーンをとろうとして伸ばされた僕の手は虚空をつかむ。瓶に突っこんでいたスプーンが、ない。いつの間にか背後にミナがいて、僕が切りわけたバゲットの残りふたつのうちひとつに直接ジャムを乗せてかぶりついてた。唇の端にパンくずやジャムがくつつく。

「おい、ミナ」

呆れて僕は彼女の左手からスプーンをひったくる。久しぶりの内地からのパンに舌鼓をうつミナは、島の湿気などものもしないストレートの髪を揺らして笑った。

「いいよね、この、口の中の水分ぜんぶ持ってかれる感じ。ごはんとはまた違う味がなんとも。お兄ちゃん、和食派なのにバゲットなんてめずらしい」

「めずらしくって悪かったな」

「やつぱりいいなあ、ミナもこうやって本土の食べ物、もつといっぱい食べたいな」

「明日はテストじゃなかったのか。こんなところで油たたき売ってないで、年号のひとつぐらい覚えたらいいんじゃないか」

「御忠告どうもありがとうございます。でもミナはその前にトイレに行きたいな」

上からもの食って下からトイレかよ。そのツツコミはミナの無邪気に立ち去る背中にかき消えた。ひゃっほい、と叫んでトイレのドアを開きおいよく閉める。はしゃぐなパンツが見えるなどと言えば「ベッドの下に夜のソロ活動を埋蔵する年頃の人に言われたくない」と年頃の妹にアツカンバーをされることは目に見えている。

僕はビニールに戻したバゲットをパンかごの中にいれ、戸棚にしまった。戸に背をあずけ、頭のうしろで手を組む。ただでさえうつりづらかったのにデジタル放送に完全移行してただのでかい箱になりさがったブラウン管のテレビの画面が、僕の身体を少し魚眼っぽく、横に拡大してうつしこむ。メタボになったらこう見えるんだろ

うな、と思いつつその場にずるずるとしやがみこむ。手の中に残っていたリンゴジャムのバゲットの端をかじる。紙を手でまるめるような音がした。これを大きめの紙袋にいれて片手でかかえたりしたらヨーロツパっぽい、なんてことを思った。行ったこと、ないけれど。

父さんは行ったことがあるのだろうか、とふと思つてみる。島民の誰も海へ出ようとしないなか、村でいちばんの腕っぷしを誇っていた父が本土を目指して相棒の漁船に乗りこんだとき、確かに彼は言いのこした。この海のむこうには必ず美しい空が広がっている、と。その青空を撮るためだけに、その写真を僕たち兄妹に見せるためだけに、父は使い捨てのコンパクト・カメラを持っていた。

窓の外に目をやると、銃弾じみた雨がいつさい止む気配を見せずに、飽きることなく降りつづける。それ自体が牽制であると言いたげに、吸い殻色の空が泣く。

ミナが水を流す音に相乗して、外の雨音が少し強くなった気がした。海が荒れる、と思うより早く部屋にミナが突撃してきて、うんこ座りの僕の肩を蹴飛ばした。彼女は床にひっくりかえる僕を指さして笑った。新しいおもちゃを買ってもらった子供のように。僕は体裁悪く頭を掻く。

悪かったな、つきあわせちまって。

いいよ、どうせ宿題終わって暇だったし。

縁側に立つ和明とそんな会話をして、傘をパチンと閉じた。和風にしつらえてある庭に面したその縁側から直接室内にあがらせてもらう。コンクリートで床下を補強しているけれど表面の板張りが湿気でいたみかけて、足元で木目がギイとちいさな悲鳴をあげた。外で傘をふると、犬が身体をふるわせて水滴を飛び散らせている姿を思いだす。年中うるさいと和明がいつだったかばやいていた鹿威しがひとつ、哀愁いっぱい音を鳴らす。よく手入れされた庭だ。海の果てに取り残された島の、一面平地でビニールハウスと田んぼと

何もない原っぱだらけの山村に、日本の切なさを一滴たらず。

和明が居間に手招きした。彼の母親がＴシャツにジーンズといういでたちで出てきて、あらあらまあ、とパチンコ玉が転がるような声をあげて走り寄ってきた。靴下と畳がこすれて乾いた音をたてる。

「隆人くん、濡れてない？ タオル持ってこようか」

「いえ、大丈夫です、もうそんなに激しく降ってないので」僕は一瞬の豪雨からふたたび小雨に戻った空を見あげてこたえた。

「じゃあ、お茶いれてくるから」

彼女は十代の少女のようにうきうきしながら去っていった。和明が不機嫌そうに座布団の上に座り、朝から変に元気なんだよ、と言った。

「誰が」僕は傘を縁側に立てかける。

「母さんが」

「なんで」

「さあ？ 女って感情の起伏が激しいから、箸が転げば抱腹絶倒なんだろ。つままないことで転げまわって笑うし」

うわあ経験者の発言。そう茶化しながらちゃぶ台の前に座った。昼間の学校で飽きるほど顔を見たのに、自宅でくつろぐ和明は糸が切れたマリオネットのようにぐだぐだしていて新鮮だ。

僕は和明の母親が運んでくれたお茶を飲み、ちゃぶ台に頬杖をついた。

「つきあわせちまって悪かった、と言うからには」畳の上でマグロと化している和明に問う。「そのかわりに面白いものを見せてくれるんだろうな」

「そう、それなんだよ」和明はバネでもついているように飛んで立ちあがり、情感たつぷりに両手をひろげて見せた。オペラでもはじまるのか。わざとらしく両手を腰にあててふんと鼻を鳴らす。

畳の匂いがようやくじんわりと鼻に届いた。

「隆人。先一ヶ月間、俺の掃除当番を代わるという条件でブツを見

せてやってもいい」

「ブツなんていう婉曲表現であらわされるほど上等のものだっていう確証があれば」

「見る価値はあると思うぜ。歴史の遺物だ。本土では博物館なんかに置いてあるんじゃないかねえのか。少なくとも、土まみれでそこらへんに転がってるものはそうそうない」

楽しそうに話しながら、和明は部屋の隅に置いてあった古い缶ケースを持ってきた。クッキーの缶か何か。あちこち汚れてへこんで落書きまでされており、幼いころの和明少年のやんちゃぶりを如実にあらわしている。彼はその缶の蓋をあけ、中身を両手でひよこでも扱うように慎重にとりだした。

小型の通信機を思わせる、手のひらサイズだがずっしりした質量のある直方体の機械。アンテナらしき細い棒が先端から突き出し、正面にはちいさな液晶がある。藻のように深い緑色をしていてもう何もうつしていない。いくつかのボタンは名称の印刷が完全に削げ落ちていて、どれが電源なのかも分からない。電池カバーはなく、新品の電池が四本びっちり詰め込まれていた。元の色が分からないほど雨風にさらされ土気色に染まっている。

思わずめぐりあえた時代錯誤なその電子機器に、僕は眉をひそめた。

「昔の無線機か何か？」

「俺も最初は思ったんだけどさ。色んな本をひっくりかえして調べてみたら、泣く子もビビる、昔アメリカ兵が使ってたラジオだったんだ。この電池はさっき、俺が新しく入れた。日本の番組を受信するのに使ってたんじゃないかな。水洗いしたらお釈迦になるだろうと思って、汚いままだけど、どうぞ」

そう言っただけで彼は僕にラジオをくれた。持ってみると想像していたほど重くもない。かつて島の奥のひろい湿地帯周辺は米軍基地だったらしく、撤退してずいぶんたつ今になっても置き土産がごくまれに見つかるという。もう十八年も前の話なのに、彼らの遺物が僕ら

のような世代に東亜戦争のリアリティを無言でうつたえかけてくる。土まみれのラジオひとつが、僕の手を外側から浸食してきそうだった。

「これをどこで？」プラスチックのかたまりを目の高さまであげて和明にたずねた。

「河内のおっさんちの裏手にある林。あそこさ、人の手がくわわつてるように見えて結構放置されてるし、木の量も多いから地盤があんまし雨水の影響受けてねえんだよ。ちよつと掘りおこしてみたら、こういうのがこんにちはだ。捨てられたのかね」

爪の先でコツコツとラジオをつつく和明。中の密度が高いのか音も高い。僕は和明の冒険ごっこに長年つきあってきた年季に自信があったが、今回ばかりは彼の肩を叩いて「まあ落ちついてこれ以上首つつこむな」と言うことはしなかった。単純に知的好奇心をつつかれたからだ。

大日本共和国の本土と水無孤島との交通手段がまだ生きていたころのもの、特に電子機器は貴重だ。二十年近く前の生活文化がそのまま凍結している島に電化製品は少ない。僕が生まれた直後、アナログ放送の終了と共に島内のすべてのテレビが巨大な黒い箱と化した。以前からある送電用海底ケーブルが機能をはたしつづけ、ライフラインには基本的に事欠かないのだが。まさか山の中からいきなり米軍兵士が使っていたものがひよっこり掘りあてられるなど、そうそうあったもんじゃない。

僕は手の中にくるとラジオを遊ばせ、中島さんのとくに持っていくか、と言った。

「やめとこうぜ、こんなおいしいもん、そう簡単に人の目にさらされてたまるかよ。とっておけば空から宇宙人が飛来してきて、この機械はラジオに見せかけて実は人類の営みを研究するための調査機能的なものでしたってな結末を俺は期待する」

和明はさも面白そうに片頬だけで笑った。こいつが馬鹿なのか天才なのかはたまたただの変人なのか、ときどき分からなくなる。十

五年のつきあいは人を理解するには短い。パターンは把握しているが、言動行動そのものが珍妙だ。

「でも、押し入れの肥やしにしておくっていうのももったいないよなあ。おもしろい悪だくみをやったときこそ人に話したくなるっていうけど」彼がため息と共にぼやく。僕はラジオの電源を入れようとして、やめた。動きそうで動く気がしない。脳死状態で眠りつづける人の横顔のように。

「こういうの、ミナに見せたら馬鹿みたいに喜ぶぞ。あいつ、本土のことにやたら興味があるらしくて、そんな本ばっか読んでんだよ。まあ誰だって一度はたどる道だろうから、そのうち飽きてくれるといいんだけど」

僕はそう言いながらラジオを和明にかえた。彼は液晶の表面を指先で撫ぜる。結婚式のときの写真をいとおしそうに見る夫婦のよなな目で。

「危なっかしいことに愛する妹を巻きこみたくない、っていう兄の愛か」からかっているわけではなく、本気らしい口ぶりでそう言う和明。「そのへん、隆人もミナちゃんも、あの親父さんの血を濃くひいてるってことだ。男のロマンじゃないか」

「ミナはれっきとした女子の小学生なんですが」

「ジャンヌ・ダルクを思い出せ。男装の戦士や侍の話はあちこちで聞く」

「本筋からそれてるそれてる」

目を伏せて手をふる。では本来の責務を果たしていただきましたしょうか、と言って和明がラジオの電源を入れようとしたそのとき、僕の耳に鈍い破砕音が届いた。つづいて元気よい少女のあいさつと和明の母親の喜ぶ声が交互に聴こえる。やばい隠せ、と言うが早いか和明はラジオをクツキーの缶に戻した。廊下をかけぬける足音が響き、それは居間の前でドリフト音が聴こえてきそうな急ブレーキをかける。

ミナは居間の障子を左右にかっぴらいて奇襲をかけてきた。もう

どうにでもなれ。僕はため息をつく。高揚したミナは誰にも止められない。

彼女はどやどやと室内に入ってきて、スカートがふくらむのもかまわず僕の前に腰を落とし、にぎった右手をさしだした。嫌味なほどこにここに笑っていた。

「ミナ、用事の前に和明にごあいさつ」

僕はミナのにぎりこぶしの意味を問う前に叱る。は、と気づいた彼女はちゃぶ台をはさんだ和明に「こんにちは、和明さん」と正座をしたまま機械じみた正確無比の四十五度でお辞儀をした。「はいこんにちは」とかえしつつも苦笑を隠せないらしい和明から顔を戻し、ふたたび右手をつきだすミナ。

「これ、とってきたんだ、お兄ちゃん」

何を、とたずねるよりも先に彼女がそののにぎりこぶしをゆつくりとひらいた。あざやかな白と緑が僕の目をくすぐる。

手の熱で少々だれているそれは純白の花だった。一輪で咲いているアリッサムとヒメウツギを足して割ったような美しい花で、茎は細くまっすぐ、そして親指サイズの葉が交互にならんでいる。無残にもミナの手によって根っこからひっこ抜かれていた。

子供がタカネノハナを無断で採集してはいけない。それは島の子供たち全員が物心ついたときから叩きこまれている言いつけのはずだが、そんなものは自由奔放なミナには通用しない。その憂うべき成長の方向性を変えるべく、僕は誇らしげに笑う彼女の眉間に無言でデコピンを打った。痛そうな音と同時にわめきながらもんどりうつミナ。彼女の手からタカネノハナがぽろりとこぼれ落ちて、畳の上に残りつくばる。

2 鎖島

年中雨がやまない島、という現状を考えれば水無孤島という名前はちよいと空気が読めていない。そのことに最初に気がついたのは和明だった。

「水無月って、六月のことだろ。梅雨が明けて灼熱の夏の熱波に地上の水が枯渴するっていう意味で。その水無に孤立の孤って、皮肉だよな。うちは水がありすぎて孤立したんだって感じ」

そんな細かいことまで考えていなかった。生まれ故郷の名前の由来や、ましてや空気の読めなさ具合など、はつきり言っただうでもよかった。だが和明に言われて気づく。ここは水があるからこそ孤立したのだと。

おそらくはこの島ができたときから何百年、何千年と、激しい嵐から傘いらずの小雨まで多種多様の雨が三百六十五日降りつづいている水無孤島。所在地は大日本共和国における関西南部、紀伊半島沖から南南東へ七十キロ前後地点、と言われている。人口は三百人弱。面積は十四平方キロメートル強。三人にひとりがお年寄り。コンビンもゲーセンもマクドナルドもない。

連絡船が自由に行き来できた十八年前までの文化をそのままに、環境にあわせてアダプトしてきた農産物と豊富な水産資源、そしてタカネノハナとひきかえに本土からわけあたえられる物資で島民はささやかなくらしを営んでいる。雨のやまない島と化す以前のライフラインはギリギリ生きているが、電話線もひいていない、テレビやラジオの電波も届かないここが、鎖国ならぬ「鎖島」となっている事実はそのままだ。

島民は本土に戻れず、本土の日本人は水無孤島に上陸ができない。そういった歴史話を飽きるほど授業で聞かされてきたからか、下級生に話す際、すっかり覚えたフレーズを一から十まで順ぐりにたどるだけでじゅうぶんになってしまった。七人しかない島の小学

生たちは、ただ純粹に畏怖するのみ。水無孤島を神に守られた島だと信じてうたがわれない。ならば僕はどうか、という類の質問は常に、かわす。

「じゃあ、別に最初から何もないわけじゃなかったんだ」

「そう、昔は普通に和歌山や大阪の港と船があつたみたいでさ。それが十八年前を境に、本土の人間がこの島に入ろうとするとスコールが来て、船が津波にさらわれるようになったんだって」

「うっそくさ」

「嘘くさいし漫画くさいけど、事実なんだよなあ、これが」

机をはさんで反対側に座る小学生の少年少女四人は、不満そうな顔でペン回しをする。つきだした唇は眼鏡をはずしたのび太の目のようだった。彼ら彼女らはたったひとつしかない教室で、すべての関節がはずれてしまったかのように伸びきり、僕の歴史話に曖昧な返事をする。別に聴かなくなつて大した損害にはならないだろう、というのは僕の甘つたれた考えだった。先生に後頭部をはたかれ、
「真面目に説明しなさい」と怒られる。

水無孤島に上陸を試みる本土の船は例外なく突然の大嵐に見まわれ、荒れ狂う海の底に転覆する。年中雨が降りつづいているのに地表や自然に影響がなく、デジタルイズの少ない最低限の生活を営んでいけるだけの環境がとつた水無孤島の謎を解析しようと、これまで幾人もの研究者たちが船を出したそうだが、犠牲者を多く出したために現在は海よりの来訪者はゼロ。本土からの物資は数ヶ月に一度、プロペラのない近未来的な無人ヘリコプターを使っておくられる。かわりにこちらが島に自生する植物、タカネノハナを出荷することで需要を保っている。なぜ本土の人間がタカネノハナを大漁に必要とするかを僕は知らない。そのへりや本土の食糧や生活用品や本などはやはりめずらしく、日本列島は近代化・機械化が急速に進み、本で読んだ未来都市そのままに発展しているのだと僕は勝手に認識している。物資の内容は税金や募金でまかなわれているらしいものから一般のチャリティーで集められたものなどがほと

んどで、すべて本土の人たちの好意で寄せられたものと分かる。

一時は未曾有の「鎖島」現象に経済水域内の水産資源管理主権問題や、無断上陸・漁業・調査をこころみる命知らずの輩と航行の規制法案とのおいかけっこがつづいていた。大日本共和国政府、海上保安庁らをおおいに困惑させたが、現在はあらゆる他の問題におさえ保留をくりかえし、しかしつつましい島民の生活を多方面で援助することを惜しまない。タカネノハナさえ絶やさなければ。

そんな雨ばかりの島で一生農作業に従事するよりは、本土に出て働いたり進学したほうがいい。それは誰もが子供たちに願うことなのだが、いかんせん島民が脱出をこころみても同様にスコールに見まわれる。上陸も船出も許されない、雨によって箱庭と化した島。その箱の中に僕は生まれ、ひねくれた十五年をすごした。

父は今どこにいるのだろうか。もうどこにもいないかも知れない実父の記憶。七歳の息子と三歳の娘を置いて、もつとも近い本州の陸地、和歌山県、潮岬を目指した男。海賊か鮪漁船の漁師のようだった、背中。

教室の窓から見える空は、黒い画用紙に白い絵の具を塗ったような色をしていた。絶えず雨が降りそそぐ。弱すぎず強すぎず、しかし傘は必要な降水量。田んぼで敷き詰められた平地の足元が、綿をまいたようにぼんやりと白くなっている。雲のうえを歩いているよう、には、見えない。傘をさした女性が雨合羽を着た子供の手をひいて教室の前を横ぎった。目があったので頭をさげると、彼女も一礼した。

僕は現在、中学三年生だ。水無孤島に高等学校はない。十八年前までは本州の高校に進学する選択肢もあつたのだろうが、現状をかんがみればこのまま僕は無理して家業を継ぐことになるのだろう。僕の母と祖母は島では希少な医者だ。きちんと本土の医大を出たふたりと違い、僕は彼女たちが持っている大学の教科書や医学書を見て勉強するしかない。そんなデタラメな医者があるわけがない、となかばあきらめぎみだが、せめて本土の大学へ進学できればいいの

に、と希求したことは三度ではすまない。

どうしたら、とつぶやきながら渦の中心でぼんやりと本ばかり読んでいるわけにはいかないのだ。作られた物語はいつか必ず終わりをむかえる。

三時になる少し前に授業が終わり、僕をふくめ五人しかいない中学生一同はリュックをかかえて一階建ての校舎を出る。制服も制靴もなく、全員が徒歩通学だ。和明が魔法瓶の中蓋をあけて茶を一気飲みする。

「お前んち、行ってもいい？」

僕はイエスとしか言えなかった。暇だったし、家が隣どうしで生まれたときからうんざりするほどつるんできた仲なのだ。本土に生まれていたなら、ベッドの下の埋蔵金だって共有する腐れ縁になったらう。

突然、背後から誰かがタツクルをかましてきた。こういう誘いには絶対利香が片足をつつこんでくると相場が決まっている。豊かな胸を僕らふたりの腕に押しつけて、「なに、隆人、和明、遊びに行くの？」とはしゃぐ利香。長い髪が僕の手の甲を撫でてすぐ離れていった。

「俺の家で遊ぼうっていう話だよ、離せ変態」

「男に変態って言われる女とか終わってない？ あたしも誘ってよ」

「それは」僕は口ごもった。和明がうちに遊びに来るのはミナのようすを見に来ることであって、つまり、タカネノハナを見に来ることである。

「男の密やかな遊戯に女が口出すな」和明が食ってかかる。

「あー、男尊女卑なんだあ。今どきダサイね。アナログタイプだね」利香なりのボケなのかと思ったがどうやら本気で間違えているようだった。

「男には男なりの事情つてのがあるんだよ。武士の誇りだ」

「司馬遼太郎か何かの読みすぎじゃない？ いいもん、あたし佐代子と帰るから。中島さんに手作りのチョコレート・クッキーを持っ

ていつてあげるんだもん」

ぴょんとジャンプして方向転換し、そんじゃねー、と手をふって走り去る利香。ミナと同類のはしゃぎっぷり。そして島の駐在さんである中島さんは妻子持ちなのに甘いマスクを標準装備で、若い女性島の島民に人気だ。

ま、そーゆーもんだぜ。和明が肩をぽんと叩く。僕は顔を伏せながらその手をしっしつと払った。苦笑する声が降ってくる。

数日前にミナが無断でとってきたタカネノハナは、地べたにひょっこり自生していたものを思わず根元からひっこぬいたのだという。一時は驚き、叱り、どうしようかと頭を悩ませたが、純粹に興味をそそられてその花を持っておくことにした。今はちいさな鉢植えにうつしかえられ、ミナの部屋の南側の窓にかざられている。母は僕たちのプライバシーを尊重するひとなので、掃除を僕たちにやらせるかわりに一切部屋に入ってこない。

規制によってくすぐられた好奇心がそうさせた。「神の花」が敬意と畏怖をこめてタカネノハナなんていう冗談のような命名をされた事情を知りたかったのも、事実。三人の隠しごとはラジオだけでもじゅうぶんだった。

自宅に戻ると、僕ら中学生より一時間早く授業が終わっていたミナは、自分の部屋でタカネノハナの鉢植えをじつとながめていた。薄いグリーンのパーカーにデニムのショートパンツ、赤と白のボーダーの靴下。茶色い鉢からひょんと伸びるタカネノハナは、たっぷりの水と土を与えられて、濡れたハンカチのようだったのに今はすっきり元気になっている。白い花びらには張りが戻り、島の空気をぞんぶんに味わおうと葉をひろげる。シルクのような表面はなめらかで、透明感があつた。

神の花は魅惑的なリングの実と同じ艶をはなっていた。

振りむいたミナはきょとんと首をかしげる。

「帰って来てたの？ お兄ちゃん」

「兄上の帰還に気づかないとはなんと愚劣な」

「復活したみたいだな、その花」和明は一步二歩と部屋に入って、胸を張るタカネノハナを見た。ミナは拒絶しない。僕は彼の頭をひつつかみ、ミナに「男をホイホイ部屋にあげるな」と言った。彼女はやはりきょんとして「だって和明さんだし」と言った。和明は「だって俺は年上が好きだし」と言った。

見た目は息をのむほど美しいが、そのタカネノハナを本土の人間が躍起になって追い求めている理由がいまだに分からない。自給率が高いのに生活用品や食糧を惜しみなく援助するほど。おそらく僕たちが知らないだけなのだろうが、大人たちに訊くこともどうしてだかはばかられてしまっている。

ミナは一ミリも動かないタカネノハナを、飽きることなく凝視していた。窓の外は相変わらずの小雨だ。生まれてから十五年、何も変わっていない天気。僕も和明も、ミナも利香も、太陽や月や青空や星を見たことがない。大気圏のひくい位置にタールをたらしたような雨雲が、昼も夜も四季をとおして泣きじやくるばかりだ。

太陽の光が明らかに足りない島の天気は歴史を重ねてアダプトしてきた植物や農産物と同様、タカネノハナも何らかの進化をとげて光合成の必要性を欠いている。ミナがちよいちよいとひっぱる葉の表面には幾筋も葉脈がはしり、光沢を忘れていない。

「とつちや駄目とか大人は散々言うのに、ほら」ミナは不満そうに眉をひそめて僕をふりかえる。「なんにもありやしない。つまんないの。だまされた気分。子供だけが駄目なものって、つまんない」「文句言うな子供」

「こんなのが必要な？ 本土の人たちって。ミナも行ってみたい。この花をなんでたくさん欲しがるのか、なんで水無孤島にみんな入れないのか、気になるよ。お父さんみたいに船を出して、本土に自力で行きたい」

「馬鹿言うな」僕は少し声を荒げた。「俺らだって島から出たら命の保証がないって分かってんだろ。なんでそんなに本土に固執するんだ。いいか、本土は漫画で見たような近未来都市になってて、俺

らの住むような場所じゃない。そこを目指そうとしたから父さんは帰ってきてないじゃないか」

「でも、本土では青い空が見えるんだよ。雨ばっか降ってるこの島とは違うんだよ。鳥もいて、虫もいて、空気も乾いてて、晴れた日は誰も傘なんかささないでおしゃれな服を着て歩いてるんだよ、きつと」

僕は肩を落とした。本土から送られてくる本には、そういった生活様式が記されてあるものもいくつか混ざっていて、ミナを容易に本土上陸の夢へかりたてる。

「島の伝統を守らないで、タカネノハナをひっこぬいて家で育てるのは、その憧れのあらわれか？ 見つかったら怒られるどころじゃすまないぞ」

「お兄ちゃんだって、どうしてミナが見つけてきたこれをどこかに植え直したりしないの？ 止めないってことは、いいってことじゃないん」

子供らしい純粋な質問に、言葉に詰まる。おおざっぱに好奇心だと言ってしまうばそれまでだが、採取してみて本当に何かまずいことでも起きるのかというリスクをはらんだ体験を試してみたかったとか、世界で唯一水無孤島にしか自生していない理由を知りたかったとか、いろいろ内訳は考えられる。何より、日本人が命がけで本土へ持ち帰ろうとしたこの花のニーズの大元を知りたかった。僕らからすればただの植物であり、ただの「神の花」なのに、彼らにとっては文字どおり高嶺の花なのか。

だけど誰だって、高い場所にいるからってその場が居心地いいとは限らない。箱庭のように思えたこの島に、すすり泣きのような雨が降りつづくように。落ちたときに怪我がひどくなるのは高い場所だ。

僕らは雨を避けてなお天空に向けて背をのばすタカネノハナを見ながらジュースを飲み、お菓子を食べ、ランプをして遊んだ。ゲームもネットも携帯電話もない、つつましいと言える縮尺で僕ら若

者もこの島で過不足なく生活している。本土の生活がいかに豪華なものか、僕は知らないから、今日も傘をひらき泣きむしな空を意味なく見あげる。

退屈な日常をぶちやぶろうとして冒険に出る主人公の本はいくつも読んだ。本土の図書館から飽和された本たちがボランティアで集められ、水無孤島に贈られ、僕はその紙束から本土を知る。絵に描いた餅は餅の味を知らないから旨そうかどうかも分からない。

本土の日本人は僕ら水無孤島の住民をあわれんでいるのだろうか。けどそれは、生まれてすぐに捨てられ段ボールの中で凍死した子猫に「外の広い世界を知らないまま死ぬなんて」と同情するような傲慢さははらんでいる。それは嫌だし、そこまで島民は絶望していない。

僕らはそもそも、このちいさな島でのささやかな田舎生活を十五年つづけてきたから、傘を持たない生活の幸福なんて憧憬れるとかかりも、これまでなかったわけで。

「ミナ、あのタカネノハナ、どこで見つけた？」

大貧民の僕は手元に残った六と九を床にほうって言った。ミナはもちろん、和明まで僕をいぶかしげな目で見やる。僕は片鼻をすすった。

3 花卉

電話線はなく、ラジオの電波もとどかない。テレビは媒体がデジタル放送を受信できない。だが天気予報は必要なかった。間違いなく日々の天気は小雨で、一週間に二日は強い雨、ときどき荒れ模様、嵐、横殴りのみぞれ、冬場には軽い雪、ひどくて雹、そんなところだ。僕らは玄関を出るとき、かならず傘を手にする。右手がオートマ化された装置の作業工程のように傘の柄をつかみ、パンとひらくしめった空気が肌をやさしく撫でた。揺れた前髪がまつげに触れる。変わらない小雨。僕の十四年間、「鎖島」の空はいつでも吸い殻色で、泣いていて、偉大な宇宙と僕らをとおせんぼしていた。

そして、現在。

くると肩の上でまわるミナの傘。ピンク色の花がちらばっている。万華鏡のようにまわりまわって、ふりかえって、ミナが「こっち」と山側方面への道を指さす。最近替えたらしい黒い傘の柄に手首をかけて、和明が「子供は元気だねえ」と笑う。僕は柄を持っていないほうの手をズボンのポケットにいれて歩きだした。

田んぼにかかる浮橋のような細い道をさくさくぬけて、やがて田んぼの海もぬけ、ミナは地盤を固めた道ときっちり区切られた茂みをさした。ミナが大好きな「となりのトトロ」で、メイが小トトロと中トトロを追いかけるときにもぐりこんだ榛莽によく似ていた。低木がからみあい、葉が限界までつめこまれた茂み。幅は学校の敷地ほどもあり、先は山のほうへ向かっているので奥まで行けば森までぬけられるだろう。

「リスを追いかけてこの中にもぐったら、真ん中あたりに一本だけあった」

リスなんかおっかけんな、メイじゃあるまいし。

体格のちいさい彼女なら背をかがめるだけでぬけられそうなトンネルがひとつ、足元にできていた。身長百七十センチ近い僕らなら

ステイヴ・マックイーンまがいの匍匐前進になることうけあいだ。自然にできたらしいその葉っぱのトンネルを、ミナが膝をついてずんずん進む。観念して僕らも傘を閉じ、腹ばいになった。

葉に何度か頬をチクチク攻撃されながら、小ぶりで触り心地の悪そうな妹の尻を追いかける。葉の密度が高いのか雨はほとんどとどかない。地面も乾いている。肘の力だけで前進するため、息が乱れてくる。目前に妹の素足があるので背景を消せば僕はただの変態だ。やがて少しトンネルの背が高くなり、中腰になれるほど空間が広くとれた。やはり雨は届かない。背丈が足りているミナは服の土をはらう僕と和明のとなりで伸びをした。

「ここだよ。はしっこにね、タカネノハナがぽつーんと」

ミナが指さす方向には、確かに無造作に地面が掘られた跡があった。ここで無残にも神の花を根っこごと引き抜いたのだらう。神に喧嘩を売っている。そんな靈験あらかたな花だとは僕も本気で信じていないけど、生きたままの虫を無邪気にかっさばく幼子を見るときと同じ類の気持ちになった。

あたりをみわたすがどこにも同じタカネノハナは見つからない。ひとりぼっちで咲いていたことを思えば不憫だ。急に力が抜けてしまふ。

僕はその場にあおむけに寝そべって、秘密基地のように長くのびる葉っぱの天蓋を呆然と見あげた。木漏れ日はなく、薄暗い。ここでカードゲームをすれば立派に子供の遊び場になりそうだ。こういうところで遊びたかったなあ、と思えば自分の生まれを少し呪いたくなる。トトロの映画はいつだって憧れだった。蒸し暑い灼熱の太陽。晴れた空の下で洗濯ものを踏む。僕らが毎日使っている傘で、大きな樹も伸びるし、空も飛べる。

雨にぬれることのない、風すら通りすぎてゆく木のトンネル。

「何してんの、お兄ちゃん」

ミナがしゃがんで僕らの顔をのぞきこむ。和明がひらひらと手をふった。

「隆人おじさんは子供より体力がないんだよ」

「うわ、おじさんだって。終わりだよ、それ」

「俺がおじさんなら同じ年のお前もおじさんだバカ明」僕は身体をぐるりと半回転させて和明の顔にチョップを落とした。「まだまだ若造だぜ、ガキだぜ、野山をかけずりまわって暴れまわって泥まみれになってこそ青春を謳歌していると申せましょう」

「無茶言うな、おたがいインドアのくせに」

ミナが頭上でけらけら笑っている。地面が冷たくて心地いい。風にざわめく葉擦れの音が耳に甘い。気を抜くと眠ってしまいそうだった。ミナは和明にタカネノハナを見つけたときの高揚具合をあれこれと説明している。うわー見つけちゃったあつていう感じでね、気がついたらひっこぬいてたの。で、やばいと思ったんだけどこんな楽しいことないと思つてさ、それでダッシュで和明さんちにむかったの。お兄ちゃんがそこにいるのは知ってたからね。頭がふわふわしてて、私、何考えてたのかぜんぜん思い出せないよ。とにかく楽しかったんだ。楽しくてしょうがなかったんだ。これが本土と水無孤島をつないでるものなんだって考えたら、この花さえあれば本土に行けるような気がしたんだ。

風が内緒話のような声をあげる。僕はタカネノハナが一輪も咲いていなかったトンネルの草木をながめ、目をとじる。

足がしびれた。

彼女ができて腕枕なんか絶対してやれない、と思った。

正座をくずした途端、力の強すぎるマッサージ器を押しつけられたような痛みとしびれと冷たい感覚が足首を襲い、顔がこわばった。当然立てるはずもない僕はその場にへろりと膝を折る。隣のミナも同様だった。足の甲に畳の跡がくつきりと残っている。

「お兄ちゃんのせいだ、タカネノハナの場所を知りたがったお兄ちゃんが悪いんだ」

「ひとのせいにすんな諸悪の根源。だいたいなんでひっこぬいたタ

カネノハナを持って帰ってきたんだよ、あの場所に植えなおせよ」
「だってお兄ちゃんも見たがるだろうって思ってた」

それはそうだけど、いろいろともうちよつと勉強してほしい。

夜遅くまで森で遊んでいた僕らは、薄暗いトンネルの中にいたせいで時間間隔が狂い、結果として門限を大幅に過ぎて村に戻ってきた。怒れる母によって拘束され、居間で座布団もひかず置きっぱなしにダイレクト正座、そのまま一時間放置された。同じ一時間かけて説教されるより、無言で正座をつづけるほうが精神的につらかった。隣の妹はしゃべりたがるし、僕はそれを払いのけるのに必死だった。確かにタカネノハナは神の花だ。ひっこめいた天罰を兄の僕まで受けるなんて。

今ごろ和明も両親に叱られているのだろうか。あの家はくだんのお茶目な母親が放任主義だから、もしかしたらここよりはましかも知れない。僕とミナは血流をとり戻しかけてなおしびれる足を必死にマッサージしながら、母があたたためなおしてくれた夕食を食べた。ごはんと味噌汁と、バゲットを使ったサラダと、ひさしぶりの肉じゃがだった。

その日の夜、僕は不思議な夢を見た。

父が遺したジョン・レノンのレコードに、「あれは夢だったのか？ あれはただの夢だったのだろうか？」という歌詞の曲があったが、今はまさにそんな気分だ。

僕の部屋と反対側のミナの部屋とをへだてたふすまの隙間から、青白いとも黄金ともとれない光がかすかに漏れていた。僕は目覚まし時計で深夜二時半だとぼんやりした目で確認し、布団から這い出て、ふすまを数センチだけあけてミナの部屋をのぞき見た。

足元には、トトロの絵柄がプリントされたタオルケットにくるまって眠るミナ。彼女の手元には本土の町の写真集。そのさらにむこうで、窓がやわらかく光っていた。タカネノハナの鉢植え。艶のある花びらのひとつひとつが、少女が笑うように、歌うように、ふんわりとかがやく光を遊ばせていた。神の後光じみた荘厳さを宿し、

それでいて赤ん坊の無邪気さとやさしさを両手で抱きしめたような、強く惹かれる光だった。

きれいだ、と純粹に感じた。

翌朝目覚めたとき、タカネノハナはすでにただの花に戻っていて、あれは夢だったのか？ あれはただの夢だったのだろうか？ と布団を押し入れにしまいながら虚空に問うた。今朝も雨が降りつづく。湿気に乗って鼻をつく畳と障子の匂いが、鎖島と化していても水無孤島は大日本共和国の領土であり僕らは日本人なのだということを、何も言わずに思い出させる。とどめに居間からは味噌汁の匂いがただよってきて、僕は押し入れの戸を手早くしめた。

どうやら僕はそうとう嫌な顔をしていたらしい。中島さんはさも面白そうに笑う。

「そんなあからさまに不快ですって感じの顔をするなよ、隆人」
不快なんだからしょうがない。これから出るべきところが出て曲線も美しくなつてゆくだろう年頃の妹の部屋に、妻帯者、五歳の息子持ち、甘いマスクで島中の女性のハートを絨毯爆撃で串刺しにする村の駐在さん、中島さんがいた。ミナの貞操の危機を察知し僕は彼に飛びかかった、という妄想が瞬間的に頭をよぎったが、僕は通学用のリュックを畳の上に無造作に置いてその場にあぐらをかいた。一日中授業が退屈で死ぬかと思ったのに、帰ってきてこんな密会をまのあたりにするとは思わなかった。

中島さんはミナとむかいあつて正座し、教本をひらいて裁縫をしていた。

「やっぱり、らしくねえ」僕は顔を限界までしかめて言った。

「何が？」

「あんなに優しくて料理も上手で聖母みたいな笑顔の千晴さんを射止めてるイケメンが、年端もいかない娘っことお裁縫なんてしてるこの光景」

「えー、年端なんかとつくにいつてるよお」ミナがぷうつと頬をふくらませた。彼女を見て中島さんが笑う。

数日前から中島さんは一週間に二度ほど、我が三沢家にやってきてはミナや母と裁縫にうちこんでいる。何かを作りたいなら奥さんの千晴さんに教えてもらえばいいのに、なぜか針仕事好きな母娘に指導されている。

「というか、何をトチ狂って裁縫なんぞ。何を作ってるんだ。そう言及することははばかられやがて機会とやる気を失った。」

「千晴さんと裕介くんは元気？」僕は鞆の中から弁当箱を出しながら中島さんに言った。

「元気すぎて手に負えないぐらいだよ。千晴は祭りの準備にはりきるし、裕介は押し入れの中に子供の秘密基地を建立しはじめるし」中島さんは僕が近づくと針と布を隠した。だけどすぐに興味を失った僕は、弁当箱を宙に投げては取る。箸箱が乾いた音を鳴らす。そうか、裕介くんももうすぐ小学生なんだ。そう思うと急にジグくさい、なごやかな気持ちになる。ついこないだまで千晴さんにだっこされて、おむつを替えてもらうあいだじゅう泣きじゃくっていたのに、今じゃ僕や和明と林の中へ探検ごっこに出かけたりして、転んでも歯を食いしばって涙を我慢するようになった。

見ているだけであらゆる問題や悩みがプリンのようになめらかに人を傷つけないものに変化してゆくあの笑顔を思い出すのに、頬がゆるむ。

「秘密基地があ、子供のころ、木の上よじのぼって見つけた座りやすい場所とか、そんなふうに呼んで、大量に本を持ちこんで読んだりしたなあ」

「中島さん、おっさんくさい」

「隆人だつてそういうこと、しただろう」

「そりゃしたけどさ、なつかしがってほんわかするほど年食ってないって」

まだ十代の折り返し地点だというのに。

ミナは一心不乱に針を動かして、ピンクの布地に白いレースを縫いつけていた。小物か何かでも作るつもりなのか。ぽやんとしていて天然な彼女にも色気が出てきたか、と思えば兄として嬉しいが、複雑だった。レモンティーにホットチョコレートを混ぜているような気分になる。

もうすぐ祭りだ。子供が主役になり、島のヒーローになり、みんなが雨水を浴びる。そんな日になっても、ミナはやっぱり、参加することを拒むのだろうか。去年もさんざん大人たちが参加をうながしたのに、彼女は衣装合わせにも顔を出さなかった。

自由奔放なところは父親似なのだろうか。あまり厳格な母に似たとも思えない。

「ミナ」僕はあらためて妹に問うた。「今年も祭り、参加しないのか？」

「しないよ。今までずっとそうだったじゃん。毎日雨に降られてるのにさらに水浴びなんて、嫌だよ。あんなことしたら、ミナ、島から出られなくなっちゃう」

針からいちども目を離さずに言う。だよなあ、と僕は落胆した。島を脱出して本土に行きたがっているミナには暖簾に腕押しだ。

外では小雨が降っている。あいかわらず、飽きもせず。僕は台所で弁当箱を洗い、ミナに「ロリコン色情狂の毒牙に注意」と声をかけ、中島さんに「俺をなんだと」とつつかれ、傘を持って外へ出た。これでもそれなりに中島さんを信賴している。

田んぼに囲まれた村落を海側へくだと、道路が石畳敷きになる。本で見た内地の長崎を縮小したような町だ。町と言っても水無孤島基準なので、ただ役場や市場や学校があるというだけで中心街扱いされているだけだ。人が多いので活気はあるし、漁船の出入りもくりかえされにぎやかだ。僕は町ゆく知りあいにすれちがいざまあいさつをして、ごつごつした岩だらけの段差を飛びおりてショートカットし、西側にある真っ白な建物に入った。水無孤島唯一の診療所である。

鎖島化以前からあるこの三沢病院は、本土の医大を卒業し総合病院勤務をへて戻ってきた祖母が作ったもので、現在は同じく医大出身の母と数人の医者で運営している。薬品や医療機器などは本土からの救援もあり不足することはほとんどなく、鎖島以前の設備が今も生きているので、ほとんどの治療行為はここで行える。が、難病や大量出血などのひどい外傷などには対応しきれない場合が多く、水無孤島の医療環境と医師の不足は特に重大な問題となっている。

だからこそ、この島が再び本土とアクセスできるようになれば。それは島民全員の願いだが、十八年間、それは凍結したままだ。じゆうぶんな治療ができずに命を落とした病人も毎年、少なくない。ゆえに、島民の平均寿命は本土と比べて二十歳近く低い。

普段からそんなに混雑していないが、今日は待合室に誰もいなかった。顔見知りの受付の女性に挨拶をし、母のいる診療室をノックした。

「母さん、祭りの件、やつぱミナは駄目だった」

「あいさつもなしにいきなりそれ言うか隆人」

けだるげにカルテをくつっていた母が紅茶に手をつけかけて笑った。長い黒髪を後頭部でむすび、白衣をきっちり着た彼女は、患者の来ない日を逆に喜ぶ人間だった。怪我や病気がないことがいちばん。そう言える彼女は夫を失い、年ごろの子どもふたりを育てることになつて、一体どんな心境でここに立っているのだろうか。

母はふうつとため息をつき、「一応あたしからも参加するように言ってるんだけどね」と言った。

「十一歳がリミットなんだから、ミナにとって今年で最後なのに。大人になってやるときゃよかったって後悔するよりは、最後までやらばって思うんだけど、それって大人の傲慢なのかなあ。なんなんだろ、あの子。秋人に似て、嫌なことは絶対やらないというか」

秋人とは三沢秋人、僕の父であり彼女の夫である。

「別に、毛嫌いしてる感じでもないけど」

「そお？」

「学校の友達や年下の子が参加するってとき、ものすごくうれしうだったし、がんばれて応援してるし。ただ自分がやりたいかどうかと言われたらノーってだけの話じゃないの」

「ぼやーん」としてゐるし、気まぐれだからなあ、と小声でつけたす。

窓の外からは広大な海がのぞめる。灰色の空と、静かな雨と、港を絶えず出入りする漁船。海岸線にむかつてゆるやかな坂道になっていて、排水溝に流れた雨水はそのまま海へすべってゆく。道端には花が咲き、草木が空をめざし、雨の中なのに野良猫がふらつく。肩に鯖をつめた籠をふたつ背負った漁師の水野さんが、集まってきた猫たちのためにちいさくて傷がついた売りものにならない魚をばらまいてやっている。あ、と思うよりはやくこちらに気づいた水野さんは、その恰幅のいい身体をめいっぱいアピールするように、ヒゲ面をくしゃくしゃにして笑った。僕は苦笑してため息をつき、母は彼に手を振る。

水野さんも祭りの主催者なのだから、ミナに参加を心待ちにしているはずだ。島の子供たちは誰もが楽しみにしているというのに、あまのじゃくな我が家のお姫様はそれに応じない。決して嫌いなわけじゃないはずなのに、ただ「あのお祭りに参加すると、嫌でも島から出られなくなりそうで」という理由ひとつで拒絶する。しかしその横顔に悲壮や嫌悪の色はない。

近く七十歳になる祖母が診療室に入ってきて、「患者さんだよ」と母を呼んだ。背筋をぴんと伸ばした祖母は一点のシミもない白衣を片手でなおし、片岡さんちの五歳になる雪ちゃんが熱を出したことを子細に告げた。僕は「手伝うよ」と言っただけによりかかり、過去のカルテをめくった。医学の知識は母に少し教えてもらったていどのレベルだが、見学を兼ねてこうして母の手伝いをする。

「ねえ、隆人」

母は紅茶を一気に飲み干して言った。「ミナが本土に固執してることは知ってる。でも、秋人のことがあるからさ。あたしからも言うけど、ほどほどに、お兄ちゃんからもたしなめてやって」

うん、と僕は生返事をかえした。採血の注射を打たれ半泣きで歯をくいしばる雪ちゃんの頭を撫でてあやしなながら、でもそういうのはむしろ利香が適任なんだろうなと思った。ミナと利香の仲の良さは姉妹さながらだ。兄の僕が存在が薄れるどころか消滅しそうなほど。

針を抜いたとたんにせきをきつたように泣きじゃくる雪ちゃん。彼女の肘の針跡にちいさなガーゼを貼りながら、「よく我慢できたね、えらいね、今度のお祭りもきつとちゃんとできるよ」と笑って言いきかせた。雪ちゃんは泣くのに必死で何も答えず、うなずくだけだった。彼女の母親、片岡さんは雪ちゃんをだっこして「ほら、隆人お兄ちゃんが雪のこと、えらいって」と言っただけだ。水無孤島にしか自生していない夏の花が、窓辺でちいさな鉢植えにしがみついて花弁を伸ばしている。

4 子供

井戸のきれいな水を凍らせた塊を、包丁の柄を使って少しずつ砕いた。二センチ四方ほどのかけらをとって紅茶とココアの中に放りこむ。注文の多いお嬢さんがふたりもいるから困る。僕は自分用の冷えた麦茶とアイスティーとアイスココアを盆にのせて、居間の障子を足であけた。

ミナはココア、利香は紅茶。好みが見事にわかれたふたりは今、荒れ狂う外の景色を見て何かを話している。コップをちゃぶ台の上におき、窓ぎわでならんで立て膝をつくふたりの背中に「まだ来ないって」と声をかけた。

外は大荒れの天気だ。暗い夜をやぶり捨てるような雷が数秒おきに鳴り、いつそ攻撃的な雨が斜めに吹きつける。本土からのヘリが来るときは役人以外の島民全員が自宅で待機し、電球等を一切つけない規則になっていた。村役場の敷地内にある専用ヘリポートへの着陸をスムーズに行うためだ。村役場につとめている利香の両親はかならず輸送作業に出向くので、その日の夜は毎回僕の家泊まる。ひとりでは退屈だからと利香は言うが、おそらくは雷を怖がるミナをなだめるお姉さん役を買って出たいからだと思っ

そしてまた、雷。ミナはびくりと身体をこわばらせ、しかしヘリを見たがって窓から離れない。夜の十時ごろに一度、島へ上陸したヘリが上空を飛ぶのを見た。プロペラのついていない、まるでUFOのような迫力の無人ヘリ。戦闘機のような轟音を響かせて、点滅する三色のライトが黒い塊の存在を浮き彫りにする。銃弾のような雨をはじいて、たった一瞬飛び去っただけのヘリだが、ミナはおおいいよるこび、僕は呆然とした。「あれに飛びのったら、嵐に巻きこまれずに本土まで飛べるかも知れない」とはしゃぐミナの頬をつねった。

大日本共和国というこの極東の国は、すでにSF小説でえがかれ

た近未来の文明を超越している。そう確信するに足る迫力だった。

森と田畑と古い日本家屋しかない、デジタルイズを拒まざるを得なかったこの島の住人にとって、プロペラを使わず飛ぶ巨大な輸送用ヘリの上陸は侵略されている気分になる。一体どれほどの機械化がすすんでいるのか、分からない僕らは畏怖するしかない。その気持ちには着実に、子供たちに本土への憧れと敬遠を植えつける。

ふわつとあくびをしたミナの肩をたたき、利香はアイスココアのグラスを彼女の手のにぎらせた。ミナはそれを何口か飲むと、ふたび窓の外に目をやった。が、それでも眠気に耐えきれなくなったのか、ころんと利香の肩に頭をあずける。

僕はやがて静かな寝息をたてはじめたミナを横抱きにし、子供部屋に寝かせた。サンタクロースの到着を待ちわびてそのまま眠ってしまう子供のようなだった。この島にサンタの概念は、ない。そもそも子供たちに贈るものがせいぜいお菓子しかない。十二月二十四日の晩は、単に親が子へクリスマスプレゼントとして少し豪華な食事を作るていどだ。

布団の中でちいさくなるミナの手元に、いつも大事にしているうさぎのぬいぐるみをあてがうと、彼女はそれをそっと抱きしめて頬をすりよせた。この島の神秘や謎や本土への憧憬など、このときばかりはすっかり忘れて、僕は妹の無防備な寝顔を見つめた。

静かに障子をあけて部屋に入ってきた利香に、「本土に興味があるらしくて」と話しはじめた。

「誰だつて一度は子供のころにあこがれるだろうから、別に不自然ではないんだけど、ミナの場合は好奇心から来るそれ以上の執着を感じる。こいつ、まだ十一歳だぞ？　もう十一歳、とも言えるけど、本土への興味は薄れて現実的に考えるようになるころだけど、逆に本気で本土やこの島のことについて調べようとするにはちよつとまだ子供」

「タカネノハナをひっこぬいて持ってかえっちゃうぐらいだもんね、大物の器だよ」利香は苦笑して、窓際においてあるタカネノハナの

鉢植えを見た。「子供はとっちやいけないとか言いながら、大人はさんざんに集めて本土に出荷してることが、不思議でしょうがないんだろうね。あたしも、隆人もそうだった。でもね」

彼女はため息をついて、しあわせそうに眠るミナのそばに座って彼女の頬を撫でた。「あたしも、タカネノハナが本土の人に渴望される理由が分からない。それでもこの花が『神の花』呼ばわりされる理由、なんとなく分かるよ。この島はずっとそんな感じ。神様に守られた島なんだって信じて疑わなかった。ここは本土とは違う場所なんだって。外部からの船を周辺の海が拒絶するようなことになる前は、年中雨が降ってても日本と貿易があつたっていうのにな」ミナがぶすつと鼻を鳴らした。利香は彼女の肩までトトロのタオルケットを引き上げて、背中を軽く叩いてやる。僕は畳の上にじつと胡坐をかいたまま、動かなかった。

水無孤島の水域内に入る船が例外なく嵐に見舞われるようになった十八年前。そのころに何があつたかと言えば、僕の知っている限りでは東亜戦争が開戦したことで、タカネノハナの本土出荷がはじまったことぐらいだ。これまで水無孤島にしか自生していない美しい花という認識しかなかったタカネノハナを、開戦前に突然本土の人間が大量に必要とし、あちこちに自生するそれらを買収しにくるようになった。その半年後、くだんの大嵐の発生で外交を絶たれた。何百年、何千年と雨が降りつづいているにもかかわらず地盤や自然環境に大きなダメージがない、水の絶えない島。その謎を誰もが歴史をかけて追い、「本土からの上陸が不可能」という新たな謎もくわわり、水無孤島は孤立した。杓子定規な政治家のコメントは生きず、高齢化がすすむ島の住民に策があるはずもなく、何もかもが凍ったままだ。

ミナも他の大勢の子供たちと同様、水無孤島の不思議な歴史と現象に興味を持つようになったが、その執着はやがてタカネノハナにも矛先を向けた。ひっこぬいて持ち帰り、部屋で育てて毎日ながめる。なんの変化も起きないしミナにも悪影響はない。ただの花だ。

神に守られた島の、美しい花。

利香は畳にうつぶせになって、鉢植えのタカネノハナをちよいと指でつついた。「きれい」とつぶやく声が聴こえる。僕は彼女のとなりに座り、「何も感じない？」とたずねた。

「なーんにも。でも、不思議だね。この花をじつと見てみると、心があたたかくなる」

「ぼんやり寝ているうちの妹のアホ面を見てるときみたいに」

「シスコン兄ちゃん」利香はくすくすと笑いをこらえる。「そうだね、ちいさい子供を見てるときみたいな気分かな。タカネノハナですごくきれいで、まじりけのない純粋な白で、何ものにも侵されない、そんな感じがする。だから『神の花』なんだよ。人間が容易に触っちゃいけない、禁断の花なんだよ」

僕はくいくいと花びらをひっぱった。罰あたり、と利香に叩かれた。苦笑しながら、僕は「でも今になっても本土に大量出荷してる」と言った。

「花といえば鉢植えに根づくものしかない近未来都市っていう話が本当なら」利香は立ちあがってため息まじりに言った。「焦がれるんじゃない。知らないけどさ。ただひたすらに盲目かつ貪欲なんだよ。私たち含め」

雷。窓から殺人的な閃光が降ってくる。遠くから轟音が聴こえてくる。すぐ近くで戦闘機の飛来を見ている気分になる、三百人ほどの人間がいつせいにコントラバスを鳴らしているような音。強い力をくわえられた鉄塊が熱をもって曲がるような、音。豪雨の中、暗い夜空を横ぎる光。三色のライトが点滅し、巨大な黒いヘリが上空を通過しようとしている。雷。その白い光を背景に、僕は大日本共和国とこの島とをつなぐ無人の機械を、見た。見下されていた。その空飛ぶ機械に腹の底まで貫通されそうだった。ガラスを叩く無数の雨粒が僕を笑う。

ヘリが去り、しばらくして雷もやんだ。何もなかったように、島がいつもの表情をとりもどす。何がそんなに悲しいのか絶えず泣く

空。となりで硬直していた利香がふうつと息を吐いて、唇を噛んでいた。僕はその口元に親指を添えてやめさせる。彼女は一度も僕を見なかった。豪雨があいかわらず、空と僕らを邪魔する。

利香は勝手知ったるミナの部屋とばかりに、慣れた手つきで押し入れから泊まりのとき用の布団を一式出した。ミナのとなりにそれらをきちんと敷いてぺそつと座り、「寝間着に着替えたいんだけど」と言った。僕はあわてて部屋を走って横ぎり、「じゃあまたあした」と言っただけで廊下に出た。閉められた障子のむこうから、激しい雨音にまぎれて衣擦れの音が聴こえた。まぶたがしびれたように震えている。

老朽化が進む古い校舎の古い廊下のむこうに、よく見知った小さいシルエットを見つけた。僕よりはやく、となりの和明が「裕介くん」と叫んだ。ああそうだあのサイズは裕介くんだ、と思うより早く裕介くんは和明の足元にタックルしてきた。無様にすっころんだ彼の手から鞆がこぼれる。

「え、てか、なんでここに。ここ、学校だよ？ お父さんは？」

僕は和明の鞆を拾って、和明にしがみつく裕介くんにたずねた。

戦隊ヒーローのシャツに半ズボンの彼は、「お父さんなら一緒だよ」と答えた。

「今日はね、学校の先生にあいさつに来たの」

「ああ、来年はここに来るんだっけ」和明が裕介くんの腋に手をさしいれて立たせる。「もう一年生か、でかくなったな。これから学校でいろんなことを勉強していくんだぞ。スカートの中身とか、生理の仕組みとか」

「うちの子に変なこと教えんな、悪ガキふたり組」

廊下のむこうからマダムキラー中島さんが歩いてきた。今日は一番なのか。彼に抱きあげられた裕介くんは、「こんにちは、隆人お兄ちゃん、和明お兄ちゃん」と言った。

「こんにちは。ちょっとタイミング遅いけど、あいさつできるんだな、えらいな」僕は裕介くんの頭を撫でた。

「中島さん、まだ夏休みにも入ってないよ。入学はもうちょっと先でしょ」和明が肩をすくめる。

「まあそうだけどさ、古い教科書をゆずってくれる上級生の子も探さなきゃだし、早いとこいつにも慣れて欲しいし」

「慣れるのは入学してからだっておかしくないでしょ。確か来年、裕介くんをふくめてふたりしか新一年生、いないんだし、すぐ仲良くなつてあちこちかけずりまわるようになるって」

この島の出生率はそもそもが低い。年々人口は減つてゆくが、この土地柄だ、しかたない。僕は手に持ったままだった鞆を和明にかえし、裕介くんのちいさな手をにぎった。

「裕介くん、先生とのお話が終わったら、お兄ちゃんたちと遊ぼうか」

「いいの？」

「もうお勉強終わって帰るとこだし。裕介くんももうすぐ一年生だから、お父さんいなくなつて平気だよな」

「おおい、隆人」中島さんがあわてたが、僕は笑つてかえした。

「どうせ家、千晴さんにまかせて仕事ぬけてきたんでしょ。夕方までには送るよ」

和明が裕介くんに髪をひっぱられ、「いてっ」と叫ぶ。中島さんは苦笑して裕介くんをかかえなおし、「じゃあまたあとで」と言つて教務室のほうへ歩いていった。

二時間ほどして親子が戻ってきて、僕と和明は裕介くんを連れて学校探検をした。中島さんはそのまま仕事に戻った。千晴さんに甘えてばかりの旦那も頼んねえぞ、と言うと殴られた。

誰もいない校舎をぐるつとまわり、いつも僕らが使っている教室で「たたいてかぶつてジャンケンポン」をやった。丸めて輪ゴムでとめたプリントの束と下敷きで。勝つたのにプリントの束を裕介くんととられ、奪いかえしたとたんに下敷きで防御された。和明との

ガチ勝負では本気の殴りあいになり、裕介くんが楽しそうに笑っていた。一時間ほど、そうして遊んでいた。僕らの遊びはたいいていこんな感じ。ゲーム機がないからなになりに娯楽を見つけて日々の隙間を埋めている。隙間なんて、そんなにないけれど。

雨が朝より少しやわらいできた窓の外をじっと見つめている裕介くんの背中に、荷物を片づけながら「そろそろ帰るよ」と声をかける和明。和明くんはその真ん丸な目で僕らを見すえた。

「ねえ、隆人お兄ちゃん」

まさかの名指しに僕は「何？」と返事をする。

「なんでこの島つてずっと雨が降ってるの？」

「あらためて言われてもなあ」僕は肩をすくめた。「お兄ちゃんにも分らないんだ」

「なんで？」

「理由までは知らない。この島は大昔からずっとこんな感じらしいし。神様に守られた島だよ」僕は紋切り型の返事をした。

「神様に守られているなら、どうして僕らはこの島から出ちゃいけないの？」

「それは」少し考える。「島の外の海には、怖い化け物が住んでいるからね」

がーっ、と叫びながら彼の腋をくすぐる。きゃっきゃと笑う裕介くんに和明も笑う。僕は彼を抱きあげながら、それでもいつかは、と思った。何かに、何かの変化があれば。

校舎を出ると、雨は小ぶりになっていた。傘をさそうとすると、裕介くんがすつとんきような声をあげた。

「見て見て、こんなところに花が咲いてるよ」

彼が指さした校舎の陰には、雨からのがれるようにひっそりとタカネノハナが花をひろげていた。「こんなとこにまで」と和明がつぶやく。僕も驚いた。これまでこの花は山奥の、人目につかないところに自生しているものだったから。

誇らしげにその白い花弁を見せつけるタカネノハナを、裕介くん

はじつと見ていた。そして「きれい」と言いながらその花を摘もうとしたので、僕はあわててその細い手首をつかんだ。

何も考えずにそうした、その一瞬。

きょとした眼で僕を見あげる彼に、僕は何も言えなかった。

「子供はその花をとっちゃいけないんだ」と言えばいいものを、その言葉をすっかり忘れてしまったように、僕は呆然と彼の手をつかんだままだった。

和明が僕の手をほどいた。彼の責めるような視線に気圧され、僕は目をそらす。触っちゃいけないのだと思ったらしい裕介くんは、それ以上タカネノハナに近づこうとしなかった。そのかわり、僕のもとへ一歩踏み出した足が大きい石か何かを踏んだのか、その場以前のめりにすべった。

派手な水しぶきをあげて転ぶ裕介くんを見て、うあちゃー、と僕はこめかみに手を当てた。あわてて和明が抱きあげる。泣くかと思ったが、裕介くんは泥まみれになりながら目にいっぱい涙を浮かべて歯を食いしばっていた。彼の顔の泥をぬぐいながら和明が「どうか痛くないか？」とたずねると、ちいさくうなずいた。

「もうすぐ一年生だもん、泣かない」

真っ赤な顔で、泥だらけの手で涙をぬぐう。顔がさらに泥だらけになってゆく。僕は苦笑して「えらいぞ」と裕介くんの頭を撫でた。駐在所の官舎に半泣きの裕介くんを送りとどると、千晴さんは泥まみれの裕介くんの服を玄関で脱がせ、「遊んでくれてありがとうね」と笑った。すっぴんで、シンプルなポニーテールにワイシャツなのに、色っぽくて美人だ。

「すみません、俺らがついていながら」和明と僕は頭をさげた。

「大丈夫だよ、どこも怪我してないみたいだし、子供はすべて転んでベソかいて大きくなるんだから」

「僕、泣かなかったよ」

「そう、えらいえらい」千晴さんはタオルで裕介くんの足を拭いた。そのままお風呂に直行する裕介くんの背を見送って、僕は「あの」

と千晴さんにたずねた。

「裕介くん、祭りに出るんですか」

「本人がやりたがってるからね。今年が初参加だし。天雨祭、ミナちゃんと一緒に出るってことになったらもつとよろこぶだろうけど」

「ミナは」僕は息をのんだ。「今年も出ないつもりみたいで」

千晴さんは泥まみれのタオルをちいさくたたんで、そう、とつぶやいた。さびしそうに笑う千晴さんの唇は、やけに整っているだけに微細な感情を浮き彫りにする。

僕たちは玄関で馬鹿みたいに突っ立って、千尋さんの物憂げな表情を見ていた。遠くから、裕介くんがシャワーを浴びる水音が聴こえる。

「ミナちゃんは」

千晴さんが静かに苦笑した。「不思議な子だね。私たち大人に対して物おじせず本土のことを訊いてくるし。それがいいのか悪いのかは分からないけど、あの探究心はお父さんの影響なのかな」

そこまで言うとき千晴さんは口元を手でおさえて「ごめんなさい」と言った。

僕は軽く首をふって、「じゃあ、またお祭りで」と笑って傘をひらいた。自宅へのゆるい坂道をのぼっている途中、和明が僕の背中を強く叩いた。足元で雨水がかすかに跳ねる。

5 脱出

父親の記憶がない、わけじゃない。

三沢秋人という村一番の変人は、娘のミナよりさらに探究心の強い男で、本土上陸への夢を少年のようにむきだしにしている無邪気なおっさんだったと、中島さんや水野さんは語る。父はそれまで自由に行き来できていた本土への航路を断たれ、そのおよそ十年後、妻とふたりの子供を置いてある日突然、島を出ると言いだした。七歳だった僕は泣きじゃくって止めたらしい。父は僕とまだちいさかったミナをまとめて抱きしめ、旧式のコンパクト・カメラを見せてくれた。

「これで本土の空を撮ってくるぞ。お前たちは見たことがないだろう、透きとおるぐらい高くて、きれいな色で、どこまでも広い青空を。父さんはこのカメラにその空の写真を撮って、現像して、かならず戻ってくる。ふたりに空を見せてやる。神様だって、それぐらい許してくれるはずだ」

僕も行く、と言うと父はたしなめた。この海のむこうには怖い怪物がたくさんいるから、父さんがやつつけてきてやる、怪我させたくないんだ、と。

なぜそんなにも本土上陸を願ったのか。タカネノハナとこの島の謎を解明したかったのか、本土の文明に興味があったのか、単に閉ざされた島で一生をすごすことが嫌で脱出したかっただけなのか。もしかしたら本当に、ただ青空の写真を撮るためだったのかも知れない。青空の写真なんて、本で何度も見たというのに。

栈橋から大勢のひとに罵られ、泣かれ、見送られ、父は愛用の船に乗りこんだ。島民の船出を察したように空が怒り、海が荒れた。何人たりとも箱庭から出すまいと。父は最後に一度だけ甲板からふりかえり、子供のように笑った。

それから八年、水無孤島に父が帰ってくることはなかった。荒れ

狂う空と海の大口の中へみずから飛びこんでいった無邪気なおっさんを、誰もが称賛も罵倒もしなかった。

玄関の鍵をあけ、傘をスタンドに放りこむ。母は病院にいるはずだ。「ただいま」と声をはりあげても返事がなかった。ミナは友達の家にでも行っているのかも知れない。我が家の門限は六時なので、それまでに帰ってくればいいことになっていた。僕は宿題を手早くすませ、風呂を沸かしているあいだに家族三人ぶんの食事を作った。普段、帰りの遅い母は夕食を作らない。

味噌汁の味見をしているとき、外で雷が鳴った。地の底から響く、強い胎動のような。外界にさらされゆくことを求めず求められず、永久につづくかと思われた母の脈動。その記憶を今もしつこくこじあけるから、この島は古い時代の羊水ごと守られた胎児のようだった。何千年も前から、祭りの起源のころから。

例えば本土との航路がまだつうじていたころはどうだったのかと考えてみる。父も母も、祖母も、あたりまえのように船に乗って本土と水無孤島とを行き来していたのだ。だけど僕らはその時代の名残りすら受け継いでもらえず、教科書の中に置き去りにされた何もかもとぎれた輪郭線をたどって生きている。雨のやまない島。その雨水を夏の祭りでめいっぱい浴びることで無病息災を願い、純白の花を「神の花」として崇めているのにそれを本土へ出荷して政府の機嫌をとる。タカネノハナは僕にとって、ただの花だった。艶っぱい女性の凛々しさと荘厳さをあますことなくふりまく、ただの美しい花。だけどミナにデコピンをしたときから、その意味が少しずつ変化していた。僕のあずかり知らぬところで、物音ひとつたてずに。

だから、と鍋の火をとめて思う。多分僕も、この雷の音におびえている。

ふと時計を見ると六時を三十分ほど過ぎていた。一分でも門限に遅れたらタコ殴り、というほど厳しくもないが、少しミナの帰りが遅い。まさかも帰ってきていて、昼寝でもしているんじゃないだ

ろうか、と思いすべての火を止め、ミナの部屋に入った。そこには誰もいなくて、彼女の学校用の鞆が無造作に床に放つてあった。

僕ははっと息をのんだ。窓辺に飾ってあるタカネノハナが、白く淡い光をはなっている。かつて僕が夢に見たように、美しい光を。だが花弁は張りを失ってだれてしまい、光もかろうじて内側から発光しているだけのような、弱々しいかがやきだった。僕はかけよって花弁に触れる。しわみれになった白い表面は、少し力を入れればやぶれてしまいそうなほど薄く、力をなくしている。敬意と畏怖を浴びて育った花の威厳は、今の彼女にはどこにもない。おびえる少女のようだった。

雨が強くなる。雷が、鳴る。

僕ははじめたように立ち上がって駆けだし、鍵も閉めずに家を飛び出した。悪寒が止まらない。傘もささずにぬかるんだ田畑をつつきり、靴底がぐしょぐしょになるのもかまわず走った。この悪寒を僕は覚えている。父が島を出ていくと決めたとき、母も同じ寒気を覚えていたはずだ。ようやくキャッチボールがまともに出来るようになった息子とおしゃまで母親の化粧品に興味を持つ娘を、捨てた、とは思わない。父はそんな人ではない。ただ確かに父は、僕らをこの島に残した。怪我させたくない、と言って。

違う。僕は走りながら首をふった。ミナはたぶん、違う。

雷が、鳴る。島の胎動が、僕らを、この国の国民全体をつよく震わせる。

幾度も泥に足をとられそうになりながら、とめどない嫌な予感を押し戻すようにひたすら疾走し、ミナの友達の家ドアを何軒も叩いた。

「ミナちゃん？　うちには遊びにきてないわ」

「いなくなっちゃったの？　たいへん。中島さんに連絡しないと」

「ミナなら、授業が終わってからまっすぐ帰ったみたいだよ」

おぼろげだった嫌な予感が徐々に形を成し、僕は港町のほうまで走った。ミナの行きそうなところは、走っているうちにいくつか思

いあたった。冷たい雨が徐々に僕の体温を奪いにかかってくる。

僕は今の中学を卒業したら、どこに行くんだろう。本土の高校に行く選択肢はないに等しい。医大に行きたい、本土に行きたいという願いよりもさらに強く僕は当然のように、すりこまれたように「水無孤島が本土ともういちどつながりを持てたら」と祈った。荒れた海にとざされたこの箱庭の現状が島へのシンパシーを失い、僕らの反発心が暴走をはじめ。誰よりも本土から必要とされているタカネノハナをひっこぬいて、ちいさな鉢植えの中で愛でるミナのうに。

そうならない、という保証はどこにもなかったんだ。はじめから海沿いの防波堤を飛びこえ、X字がつらなつた消波ブロックの上を飛び石のようにわたっていった。海は暗く、激しい雨風が波を人の背より高く巻きあげる。どこまでも深い、嵐の空。飽きるほど見た色の空。暗く沈み、低く牽制する。僕らを拒絶して、拒絶しつづける海。消波ブロックの隙間を、分裂した波がかけあがる。蜘蛛の糸にすがりつく地獄の人々のように。

その糸の先に何があるのかも分からないまま、ただ地獄からは出たいのだという己の気持ちにひたすら忠実。

「ミナ！」

雨音、波音、風音に負けじと僕は叫んだ。入り江につながれた漁船が波に翻弄され、帆が暴れる。僕は消波ブロックの上に立ち、ひたすらにミナの名を呼んだ。シャツやズボンに雨水がしみこむ。今日はどうも子供に振り回されてばかりだ。子供のやることについていけない。

日が落ちてタール色に染まった空から、暴力的な雨と風が落ちてくる。投身自殺をするように。地面ではじめて、こなごなになってまた海に帰ってゆく。僕は呆然と荒れた海を見ていた。この島の何もかもを奪ってしまう海を。

ミナ。僕はもう一度つぶやいた。ひらいた口や目に雨が入ってくる。風にシャツの裾が暴れる。ミナ。

そのとき、僕は海岸沿いの波打ち際にぼつんと立つ人影をとらえた。黒髪に白いワンピース。膝まで海水に浸かっていて、何度も波にさらわれそうになっている。誰だかなんて確認する必要はなかった。海岸側へ戻るべく消波ブロックを飛んでわたり、砂の上に着地する。押し寄せる波に不安定な足元をすくわれ、その場に派手な水しぶきをあげて転倒した。服の中に一気に入りこむ冷たい海水と砂に顔をしかめながら、立ち上がって波打ち際をざぶざぶと走っていた。くるぶしで水が何度も跳ねる。

「ミナ、何やってんだ！」

僕は魂が抜けたように呆然と立っているミナの腕をつかんだ。そのまま浜までほうほうのていでひき戻し、砂の上にもろとも倒れこむ。いたっ、と声をあげたミナはおおむけになって涙をばろばろとこぼす。僕は起きあがって彼女の額に手を当てた。すっかり冷えてしまっているが、熱はない。馬鹿なことすんじゃねえよ、とつぶやいた。

「お兄ちゃん」

顔をぐしゃぐしゃにして泣くミナ。髪も服も海水でずぶぬれになっでいて、べったりと肌にはりついている。僕も全身ぬれねずみだった。それよりミナが風邪をひかないか気になってしかたがなかった。意味がないと分かっているが僕は彼女の半身を起こして強く抱きしめた。芯まで冷えたちいさな身体は小刻みに震えている。

「お兄ちゃん」

ミナは死に際の子猫のような声でつぶやいた。「どこにも行けないんだよ。この島から出られないんだよ。神様がミナをこの島に閉じこめるの。ミナに青い空を見せたくないんだよ。どうして神様ってこんなに意地悪なの。この島は神様に守られているんだってみんな言うけど、そんなの嬉しくないよ。ひどいよ。何にもならないよ」

とうとう子供のように声をあげて泣きはじめたミナ。冷えきった指先が何を求めてか虚空を搔く。涙と雨水と海水とが混じった水が彼女の頬をぬらす。僕は救いを乞うミナの手をつかんで胸元にひき

よせ、上半身をつよく、きつく抱いた。腕の中で際限なく涙を流す妹。潮の匂いがする彼女の髪は、僕の指のあいだで頑固にからまる。ずっとそうしてミナをあやしているうちに、少しずつ豪雨と高波がやわらいできた。ミナも落ちついた。共鳴するように。それでも目を真つ赤に腫らしてさめざめと泣く彼女を背負い、海岸をあとにした。豪雨で誰もいなくなりすべての窓が雨戸で遮断された、閑散とした港町を横ぎって、自宅へとつづく道を山側へのぼる。母のいる病院へ寄ろうかと思ったが、やめた。耳元でミナがすすり泣く声を聴きながら、いつのまに妹はこんなに重くなっただろう、と思った。下着までずぶぬれの僕ら兄妹の上に、あたりまえのように雨が降る。優しく、ピアノソナタを弾く指先のように。気がつくと僕も泣いていた。前髪からしたたり落ちる雨水に、僕の涙が混じる。

夕食前にミナがすることは手洗いの次になぜか入浴なので、僕は料理にとりかかる前に風呂を沸かすことが癖になっている。今日はそれが好都合だった。帰るなり玄関先でミナの服をすべて脱がせ、そのまま風呂までかかえていって熱い湯船に横たえた。半泣きのミナは「スケベ」と言っただけで嫌がったが、泣き疲れたのかそもそも放心状態で抵抗になっていない。それどころじゃないだと叱り、ミナの冷たい肩をおさえて顎まで湯に浸からせた。妹のひらべったい身体なんかに興味はない。不服そうに赤い頬をふくらませるミナ。白くたちのぼる湯気。

僕も身体が冷えていたので、濡れたシャツを剥ぎ捨てて風呂桶にくんだ湯を頭から一気に浴びた。さすがに年齢が二ケタになったばかりの妹の前で全裸になる勇氣はなかったので、ズボンは履いたまま湯を何度もかぶる。そうとう冷えていたらしく、肌の表面がピリピリと震えた。耳が氷のように冷たくなって、頭痛を伴う。潮氣をふくんだ髪が、濡れた手で黒板を触っているようにきしんでいる。

視界を覆う湯気に全身をふんわりと包まれているような感覚。椅子に座って、徐々にあたたまってきた身体を両手でかき抱く。何度

目かの湯を風呂桶にくんだとき、「お兄ちゃん」と蒸気のむこうからミナが僕を呼んだ。

「海が怒ってたね」

だね、と曖昧に答えて頭から水をかぶる。顔を舐めるように湯が流れ落ち、髪からしたたる。鬱陶しい前髪をざっとかきあげて、いや、と訂正した。

「あれは、怒ってるのとはちょっと違うかも」

「なんで？」

「さあ。でも、憤慨してるのとはたぶん別。そもそも海に喜怒哀楽あつたら怖いし」

そりゃそうだ、とミナが笑う。両手で湯をすくっているのを見て、ああこいつも、と思った。大人になろうとしはじめてるんだと。転んでも泣かなかつた裕介くんのように。

彼女は指の隙間からこぼれる水を見て、「ミナね」と言った。

「船になんて乗れないよ。でも、乗ろうとしたふりだけで、海がみんなになっちゃった。毎日漁師さんが漁船を出してるのに、そのときは荒れないんだよ、海。だけど私が『よし本土に行くぞ』って思いながら船に乗ると、それが海には分かつたんだね。なんでも知ってるみたい。本当に神様だ。この島には本当に神様がいるんだね」

いじわるだけど、とミナが笑う。僕は笑えなかった。

湯船の淵に組んだ腕を乗せる。「なんで海に出ようとしたんだ」とたずね、すぐに「っていうのは、愚問だろうなあ」と自分で流した。

「愚問ってどういう意味？」

「んなもん聞くんじゃねえよっていう、つままない質問のこと」

つままない質問。ミナが復唱する。まだ大人になりきれていない幼い声が天井で反響する。僕は湯船の淵に頬杖をついた。

「お兄ちゃん、ミナに、お祭りに出て欲しいって思う？」

「強制はしないけど、参加できるのは十二歳未満なんだから、最後ぐらいはと思うけど」

「出るよ、お祭り。今年はある」

僕は顔をあげた。天国にいるような半透明の湯気が、ミナの白い肌をさらにきめ細かく見せる。我が妹ながら将来が不安すぎる、男をあしらう技術を培ってほしいとつくづく思う。「出るって」と声を荒げ、僕はこれまでの頑固なミナから一転して不気味なまでに素直になったその態度に面喰らった。湯船の内側にがつくりと顔を伏せる。テスト勉強を放り投げた学生のようなため息をつくミナ。

「いいの。さっきので、ミナはもうこの島から出られないって分かったし。もういいの。この島にいるだけでもしあわせだから、大丈夫。ミナには友達がいるし、お母さんもおばあちゃんもいるし、何よりお兄ちゃんがいる。だから、お祭りに出るよ」

ミナはすっかりあたたかくなった頬を僕の肩にすりよせる。普段、兄の僕に甘えることの少ない彼女のそんな仕草に、目を半分伏せた。長い髪に指をとおすと、潮でいたんでしまったのかひどくひっかかった。外の雨音が反響して、浴室内に響いていた。ミナはもう泣いていない。

ちゃんとあつたまつてから出るよ、と一言注意して脱衣所でびしょぬれのズボンを脱ぎ、かたくしぼって干した。頓挫していた夕食を作って居間のちゃぶ台に並べると、寝間着を着たミナが髪をタオルで拭きながら風呂から出てきた。首筋に手をやると、じゅうぶんにあたたかいのでひとまずは安心した。「海に出ようとしたことは母さんには内緒だぞ」と言うと、ミナは顔をこわばらせてうなずいた。

だが、ふたりでもそもそと夕食を食べているそのわずかな時間に「ミナが行方不明になったってマジかー！どこ探してもいないぞ！」という中島さん夫婦を筆頭に、母、祖母、天雨祭の主催者である水野さん、和明や利香、その他ミナの友人もろもろが僕の家を突撃してきた。そのたびこのとーり生きてますよと立ちあがって見せるいつものおとぼけなミナを見て、僕はため息をつくのだった。母には裏山に遊びに行っていたと嘘をついた。数時間みっちり説教さ

れたが。水野さんにミナの祭りへの参加表明を伝えると、「じゃ、練習の日程表を今度持ってくるから」と笑って、ミナの頭を撫でていた。僕は、浜辺で転んだときにぶつけたらしい膝と肘が痛んで顔をしかめた。今日の豪雨とスコールをゆめゆめ忘れるなど叱責するにぶい痛み。

夜、僕は夢を見た。

タカネノハナがミナの部屋で光る夢じゃない。

あの白くつややかな花びらをめいっばい広げたタカネノハナが、夜闇の中、地面をおおって地平線まで咲き乱れ、燦然とまぶしいほどかがやく夢。ナウシカのラストシーンのように、僕はそんなタカネノハナの大群の真ん中でぼつんと立っている。

やがて風が吹き、雨が降り、雷がとどろく。胎動のような雷鳴。茎にしがみつく力を失った花びらが、一枚、二枚とつぎつぎに宙を舞う。風に乗って、空へと巻きあげられる。大量の花びら。真っ白で、雪のような花びら。地面がそのまま浮きあがってしまうんじゃないかと錯覚するような、タカネノハナの、花びらの舞い。僕はその中心で、うまく呼吸ができずに耳をふさぎ、目をふさぎ、しゃがみこむ。強い地響きが僕を責めている。近くにあつたタカネノハナの茎をつかみ、力まかせにちぎった。涙がこぼれそうだったけれど、地面に爪を立てて耐えた。

息がつまりそうな花びらの洪水の奥、僕の視界をさえぎるその先に、ミナがいた。満面の笑みで、タカネノハナの花びらを見あげてはしゃいでいる。ミナ。叫んでも声が届かない。金属をねじまげるような音。プロペラのないヘリコプターが上空に飛来し、花たちのダンスをかき乱す。ヘリが飛んでいった方向へ吹き飛ばされてゆく花びらたちに巻きこまれ、ミナが転ぶ。視界が花びらで埋め尽くされる。ミナ！僕は叫んだつもりだったが、口の中に花びらが入って、うまく言葉にできなかった。手を伸ばしても、その指先にキスしてゆくのはひたすら花びらと雨の雫だけだった。

殺人的な純白。

祭り囃子が聴こえる。島の歴史をたたえ平和を願う祭り。僕らに雷鳴を忘れさせまいとする、和太鼓の音。

花びらたちの海に溺れ、僕はもがく。白を掻きわけ、口にはいった白を吐きだし、手を伸ばす。横殴りの雨水が全身を濡らし、体力を奪う。雷鳴。ミナ。何度でも叫ぶ。ミナ。

「そっちに行くな」

目がさめたとき、汗で全身がじんわりと濡れていた。僕はタオルケットを蹴って身を起こし、寝ぼけまなこで目覚まし時計を確認する。まだ三時間は眠れる、とふたたび布団に轟沈した。変な夢が多いな、疲れてんのかな、とぼんやり思った僕の耳に、窓の外で延々と降りつづける優しい雨音が届けられる。ほんの少しだけ目をあけて、けれどすぐに眠りに落ちた。

6 本土

石か何かをふんづけたのか、ごろりとスニーカーの底が転がってすべった。両手をふりまわして体制を立てなおすと、背後からついてきていた利香が「はん」と笑った。鼻で。しめしあわせたように鳥が何匹か、頭上ではさばさと飛びたっていた。

「そのままこけて坂道をごろごろーって転がっていけばいいのに」

「時代劇で、階段の上で斬られて階段を転がる侍みたいに？」

「そうそう、しかも隆人の場合は超田舎侍」

フナ侍が、殿中でござる！　たださえ山道で息があがっているというのに、その疲れで逆にテンションがあがった僕と利香はそのまま松の廊下ごっこを開始する。僕は足元にころがっていた手頃な木の枝を拾って、浅野長矩さながら利香の胸元を切りつける真似をする。「ぐあーっ」とうめき声をあげてみせた吉良上野介は直後に腹をかかえて笑いだす。

数秒間、忠臣蔵をやっていた僕らのあいだに和明が割ってはいって僕らをひきはなした。

「はいはい、遊んでないでさっさと歩く」

疲れているのかそれだけ吐き捨ててひよいひよいとあぜ道をすすんでゆく和明に、僕は「よくやるよ」とつぶやいた。利香がため息をつく。

「ここまで来なくてもいいと思うんだけど」

そうして僕らはふたたび、延々とつづく山道をのぼっていった。

和明が旧米軍基地付近で見つけた古いラジオは、スイッチを入れると奇跡的に機能はするものの、雑音ばかりで何も音を受信しなかった。何度も何度も周波ダイヤルを力チ力チまわしている和明を見て、僕は「本土に一番近い陸地でスイッチいれたらいいんじゃないか」と何気なくつぶやいた。それが和明に標準装備されていた冒険心をか

りたて、ならば行こうさあ行こうと身支度をととのえた彼にひっぱりつれられた。目指すは最北の海岸線。村を北上していると利香につかまり、いつもどおり「あたしも行く」と便乗され、三人で小旅行ということになって今に至る。

もともとそんなに大きな島ではないので徒歩でも二時間あれば島の端までたどりつける。僕らの住む港村は島の南西部にあり、その他七十パーセントは山林および湿地帯である。基本的に子供は立ち入り禁止だが、そんなことをいちいち守っているやつはいない。しかし、島の北側にまわりこむとなればちよつとした苦行だ。

港から海岸線沿いに歩いて、浜が途切れると雑木林の中にはいる。舗装されていないあぜ道を一時間も歩けばすぐ島の最北端に着くのだが、その一時間が長すぎた。実際に流れている時間よりもはるかに早く、僕らの体力は無駄に奪われていく。

「もうそろそろなんだけどなあ」

和明がつぶやく。思いついた吉日が命日になりかねん。子供のころに探検しただいたいの記憶をなぞりながらなうえ、雨も届かない深い雑木林の中は方向感覚を狂わせる。足元で何度も折れる木の枝や葉に、雨が染みて軽くぬかるんだ地面。じめじめと不快な空気。人の手がくわわらないだけでこんなにも自然のまま残るものかと唖然とした。僕がひきこもりなだけかも知れないが。

背中にびちゃりと水滴が落ちて背筋が緊張する。そうして顔をあげた瞬間、長い雑木林の終着点が見えた。先頭に行く和明が「着いたぞ」とふりかえる。視界がひらけ、海岸線に出る。さほど広くもないが砂浜があり、林の中から流れた雨水が自然とちいさな川を作り海に流れている。あちこちで顔を出す大きな岩の隙間を流れる水それらを飛びこえながら浜に出ると、急に伸びがしなくなった。背をそらせて、久しぶりの雨を身体いっぱいに浴びる。僕は持ってきた傘をさした。

比較のおだやかな海を前に和明は波打ち際で片膝をつき、ポケットに入れていた旧式のラジオを出した。僕と利香も彼のとなりにし

やがむ。「やるぞ」和明のつぶやきと共にカチリと電源スイッチが入る。とたん、ザーという雑音がめいっぱい流れ、やっぱり駄目かと僕らはいっせいに肩を落とした。そりやそうだ。ここは本州からかなり離れてるうえに、天気も悪く、受信媒体は旧式のラジオなのだから、条件が悪すぎる。

しょせんは鎖島なのだ。外交をこぼんだ、自然がそのまま残っている島。守り主であるところの神は、たったひとつのちいさな米軍の遺物ですら機能することを許さなかった。寵愛ゆえの束縛か、ただの軟禁か。僕らには分らない。

「一応、メイド・イン・ジャパンなんだけどなあ」

和明がラジオをひっくりかえしてつぶやく。関係ないでしょ、とぼやいた利香の声にまじって、ほんの一瞬、雑音がとぎれた。和明は驚いて音量をあげる。ときおり、プツプツと雑音がとぎれて電波を受信する。その断末魔のような声を拾って、僕らはラジオのスピーカーに耳を寄せた。少しずつ鮮明になりつつある音。

< ———ん閣諸……う領はき……未め—————う政権……し日韓米軍事同盟に現在も強く反……る意思……明……>

ピー、と雑音に周波数の高い高音がまじり、僕らはいっせいに耳をふさいだ。和明があわてて電源を切ると、ヘッドホンのコードをふいに抜いたように静かになる。波の音が周囲をゆっくりと満たしなます。ため息をついた和明が、ラジオをからからとぶって言う。

「日韓米軍事同盟って、昔できた安保条約的なやつだっけ」

利香がうーんと頭をかかえる。僕も詳しくは知らない。基本的に本土の情報はほとんど入ってこない離島なので、十八年前よりこちらの社会情勢は本土から気まぐれに贈られる文献でしか確認できない。その点、本土からぞんざいに扱われているとも言いが。

強固な安保体制を構築するため日韓米軍事同盟がむすばれ、巨大国家・大華共和国の周辺諸国に対する暴挙に耐えかねた各国政府が反論。やがて二年がかりの東亜戦争に発展し、しかし沖縄や水無孤島に米軍基地を持つ日本はさほど影響されなかった。現在は下火に

なっている。

僕らが知らされているのはそんなところだ。

「安保条約的というか、なんというか」利香がため息をつく。

「あれって十八年前の話だろ。俺さ、絶対東亜戦争とタカネノハナ、関係あると思うんだよなあ」

「それに関してなら」僕は立ちあがりながら言った。「ミナが水野さんに訊いてた」

「で、回答のほどは」

「答えてくれなかったって。子供が知ることじゃないとかなんとか。そもそもこのこと、役人にしか知られてなさそうじゃね？」

「だろうなあ、と和明が肩を落とす。「でもこのラジオ、電波受信できるんだね」と利香が笑う。それだけでも和明にとってはじゅうぶんな収穫だ。おもしろいおもちゃになったに違いない。」

二十年前に勃発した東亜戦争。それにともないはじまったタカネノハナ的大量出荷。そして島の自然封鎖。

なんとなくそれぞれがつながる理由が見えている。だが確信が持てない。戦争についてもじゅうぶんに知っているわけではない。

僕らは結局外交だつてうまくいっていないんだ。そう思えば足元がプリンの上にいるようにふらつく。この島は、今も昔も、日本の島だつていうのに。川をはさんだあちらとこちらの岸のように、僕は水を盾にしている。広大な海。

和明はもう一度ラジオの電源を入れた。ふたたび雑音があたり一帯を暴力的なまでに浸食し、かすかに聴こえるニュース番組をさえずる。途切れがちなキャスターの言葉の中に、感染症、という物騒な単語が混じっていることに、僕ら全員が気がついた。頭の中でコンセントを差しこむように、いくつもの多彩な駒があるべきマス目へと移動しつつある。王を狙い、ひとつひとつ。

「この海のむこうには」

和明が坂本竜馬のように水平線を見すえた。「誰がいるんだろうな」

そりゃ日本人だろうぜ、と答えることはばかられた。探検好き、おもしろいこと好きの和明がシンプルな回答を求めているとは思えないし、僕だって嫌いだ。

「かつて大日本共和国は、いろんなものが世界で上から何番目かっという先進国で」

僕は静かに語りはじめた。子猫に説明するように、静かに。

「車や家電や医学では最先端をひたはしっていたのに、東亜戦争が勃発する十年ほど前から墮落しきって、隣の華国に余裕で追いつかれた。医学は超絶発達してるけど、それぐらいしか誇れるものがないらしいよ。本土の医大を出た母さんがそう言ってた。臓器移植や難しい脳外科手術で来日する外国人がうんと増えたけど、学力や就職率はあいかわらずの低空飛行。昔と比べるとずいぶん貧富の差も広がったって」

利香はしゃがんだまま、傘の柄をぎゅつとつかんだ。和明は何も言わない。僕はじつと寄せ返しする波を見ていた。雨がぱたぱたと傘の表面を叩く。

「でさ、二億三千万人の日本人口まるごと寂しい人たちの国になっちゃって、誰もが何かに貪欲で、だけど何かがなんなのかも分からないまま長い寿命を迷走してるのが今の大日本共和国なんだって。日々を生きるのにも疲れて、競うことも向上することも無駄だとはやくから覚えて、そのくせ周囲が仮想敵を相手に混乱している。まるでだっぴろくてなまあたたかい大海原を大量の食糧をかかえてボートでただよっているような、そんな国だって、ばあちゃん言ってた。その中で、水無孤島は神様に守られた島だっていう言い伝えが生きていて、神の花であるタカネノハナが今もあちこちで咲いていて、のんびりした時間が流れてて、たとえここに神様がいないんだとしても」

ここは本土にとって未踏の桃源郷扱いなんだよ、と僕は言った。

利香と和明は何も言わなかった。

中学卒業と同時に本土の高校へ進学し、医大を卒業して島に病院

をひらいた母と祖母。僕らよりひとつ上の世代の、本土に上陸経験のある大人。彼らの口からは同じ言葉を聴く。水無孤島はすでに本土の教科書に載っていて、さまざまに語られているのだと。神に守られた島、神の花が咲く島、自然のままに残る島、と美辞麗句をならべて。そしておそらく現在は、本土からの上陸も島民の船出も許されない島、と書かれてあるのだろう。

米軍が遺した旧式ラジオは確かに電波を受信した。島の最北端で、ニュース番組を。だけど僕は思う。憧憬られるようなものなど僕らは持っていない、ここにあるのは雨と田畑と子供たちの笑顔だけだ。たとえ電波が僕らと本土をつなげて、海は船をこばみつづける。

来てみたらいいのに。僕はこれまでに何度でも叫んだ。

日が西の方角へほんのわずかにかたむきはじめていた。帰るか、と言って和明が立ち上がる。何事もなかったようにさくさくと歩き去る彼の背中に、毅然として振る舞っていますと太字のマジックで書いてあった。内心高笑いしたい気分だろう彼の肩に勢いよく手をまわし、顔をのぞきこんで笑った。和明も笑った。子供のように、無邪気に。

「俺の父親の血をひいてるのは、ミナもそうだけど、もしかしたら和明もなのかもな」

「やめろよきつしよく悪い、お前と腹違いの兄弟とかだったら自殺する」

うるせえよ、と笑いながらもう片方の手で彼の頭を殴る。「やめてよ、男の気持ち悪い友情に嫉妬しそうだから」と利香が笑う。雑木林の中はあいかわらず、雨が届かない。だけど僕たちは、笑った。それぞれが高揚感を隠しきれないまま。

港の東側にある公民館に戻ると、二階の大広間ではすでに祭りの衣装の寸法調整がおこなわれていた。畳敷きの広い部屋のあちこちに祭りの参加者である子供たちがちらばり、母親に衣装を合わせて

もらっている。シンプルな生成りの生地。基本は日本古来の浴衣と変わらないが、丈が膝上までしかなく、振るほどの袂もない。和太鼓を叩くんじやないかと勘違いされても笑うしかない。

僕は母に衣紋の抜き幅を見てもらっているミナのところへ行った。僕に気づいた彼女が「お兄ちゃん」と表情をかがやかせる。

「似合ってんな、それ」僕はミナの服をざっと見てほえんだ。
「でしょ？ ミナが選んだんだよ」

ミナの衣装は肌色の生成り生地で縫われた浴衣で、共衿は深い赤でかざられていた。その上から、同じ素材で作られたポンチョのような布地をはおって胸元でとめ、やわらかい布地の帯で腰を固定する。足元はシンプルな合皮のサンダル。髪は当日、すべてまとめあげてキラキラとかがやくかわいらしい髪飾りをつける。

七五三みたいだ、とは、言うまい。

「ちよつと裾が短すぎるんじゃないか。激しく動いたらやばいだろ」
「これぐらいだったら大丈夫よ」母が前をあわせながら笑う。「そもそも、激しく動くことなんてないし。踊るぐらいだから」

「その踊るっていうのがなあ」

ま、うちの妹のお転婆っぷりと変人っぷりは今にはじまったことじゃないから、と肩を落とした。「利香たちに見せてやりたいよ」と苦笑する。利香と和明は村に戻ってすぐ自宅へ帰ってしまった。

ぐるりと室内を見わたすと、ミナより年下の子供たちが何人も集まって、母親に衣装の丈をみてもらい、細かい修正をもらっている。千晴さんに帯をむすんでもらっている裕介くんの姿も見受けられた。俺もやったなあ、とため息をつく。僕は十一歳のこの時期に夏風邪をひいてしまったので、最後に祭りに参加したのは五年前だ。

嬉々として衣装あわせをするミナは、長年の拒絶のようすからは想像ができない。海で嵐に巻きこまれかけ、この島からはもう出られないのだと泣いたあの日、祭りに出ると言いだした。水無孤島で何百年も行われてきた伝統行事を、ただひたすらに拒否した島育ち

の少女。僕の妹。おぶって自宅まで歩いたあのとき、肩口ですすり泣いていた彼女の声を忘れない。

僕は片膝について目線をあわせ、「最後の年だし」と言った。

「って思っ**て**強くすすめたけど、なんか今になっ**て**ちよっ**と**後悔してる」

「なんで」ミナが笑う。鈴がころがるような声で。「ミナがやりたいつ**て**思っ**た**んだもん。これはほんとだよ。もう何でも自分で決められるんだから」

えっへんと胸をはるちびっこの頭を「こいつめ」とおさえつける。母が帯をぼんと叩いて「これで髪を結えば完璧ね」と笑った。やさしい生成りの晴れ着につつまれた彼女を見て、自然と顔がほころんだ。この姿で手桶をかかえて水をまく姿はどれほど美しいのだろうと、僕は楽しそうに裾をひるがえしてステップを踏むミナを見て思った。うさぎが跳ねるように、かるやかに、それはまどろみの心地良さ。

7 祭日

夏休みに入る少し前、七月の最初の日曜日が天雨祭の日である。年がら年中雨が降っているこの島で祭りと言っても、露天も盆踊りも何もない。ただこの日限りは島民が自主的に傘をささず、ずぶぬれになる。

棧橋から少し離れた場所にある広い砂浜に、島民のほぼ全員が集結する。全員とはいえ人口三百人もいない島では、一ヶ所に集まっても大仰さはない。防波堤を背に広がり、祭りの開始時間まで待つ。はじまるまでは誰もが傘をさしている。僕は波打ち際にやぐらを組む作業を手伝っていて、手が細かい切り傷でいっぱいになってしまった。その手を何とかすべく、完成したやぐらからおりて港側に設置された関係者用テントに避難した。

水で手を洗っていると、主催者の水野さんが紙コップに入った茶を手渡して「お疲れ」とねぎらってくれた。テーブルに座ってそれを飲んでみると、中島さんと裕介くんをだっこした千晴さんが声をかけてきた。「よお色男」といつもの調子でひらひらと手をふる中島さんにむけてべーっと舌を出す。

「誰が色男だよ、ミスター・イケメン」

「あの頑固なミナちゃんを最後の最後に祭りに勧誘した口説き文句はなんだ？ 隆人」

「妹を口説いたつもりはないけど」僕はため息をついて眉間に手をあてた。「あれはあいつが自分から言いだしたんだよ。こないだ港で、いや、ほら、山に遊びに行つてて行方不明未遂おこした日に」

とつさに真実が口をついて出そうになってあわてて訂正する。中島さんはとくにいぶかしんだようすもなく「へーえ」と笑う。

「いいよなあ、信頼されてるもんな、おにーちゃん」

「中島さんの口からおにーちゃんとか言われると心臓が凍る」僕は肩をすくめた。

「本当よ。ミナちゃん、本土の話と同じぐらい隆人くんの話ばかりしてるから」千晴さんはそう言っ腕にかかえた裕介くんを地面におろす。「ね、裕介。ミナお姉ちゃんも隆人お兄ちゃんも、大好きだもんねえ」

照れくさそうに無言でうなずく裕介くんを見て苦笑した。五歳児に口説かれた、とつぶやくと中島さんからチョップが飛んできた。

「裕介くんは、これから準備？」

「そう。今年は雪ちゃんもいるし、練習中に年上の子たちと仲良くなつたみたいだから、大丈夫だと思うけど」

僕はテーブルからおりてしゃがみ、裕介くんの頭を撫でた。「怖くないよ、練習どおりにやっていれば大丈夫。お父さんとお母さんがちゃあんと見てるから」

少し緊張しているのか表情がこわばっていた裕介くんも、かすかに「うん」と答えて頭を縦にふった。「お兄ちゃんも見てるからね」「うん」

裕介くんは他のスタッフに呼ばれ、参加者の開始位置につれだつていった。ちいさな青い傘がくるくるまわる。その背中を見送り、「じゃあ俺は戻るから」と言って着ていたジャケットのフードをかぶった。

「ああ、見てろよ、俺の華麗な撥さばき」

「毎年飽きるほど見てるからいいよ。もういらねえってぐらい」

げらげら笑う中島さんに頭をぶたれた。反撃できない身長差が悔しい。

「隆人も子供ができたら分かるよ。あの祭りに自分の息子が参加するとなつちゃあ、太鼓も調子のおつとなるってもんだ」

「子供できたらって、まだ俺、十五なんだけど」

「でも、ミナちゃんはもちろん、うちの裕介だつて相手してくれてるだろ。子供好きだつて前に言っただし。いい親父になると思うんだけどな」

確かに子供の相手は苦痛じゃないけど。僕はフードの裾を首元で

締めた。

「中島さんだつて」足元の雨水を蹴る。「ミナのこと、すごく大事にしてくれてる」

「おまわりさんだからな、そうするのが当然。和明のところ同様、家族ぐるみで昔からお世話になつてゐるからな、お前の家とは。裕介もいい人たちに恵まれたもんだ」

「もう裕介くんも小学生になるんだし、過干渉になつちやだめだよ。男は勝手に父親の背中を見て育つんだから、中島さんさえしつかりしてりやあの子も強靱に育つ」

うちの通称「無邪気なおっさん」は、荒波の奥に消えるその瞬間まで背中を見せず、桟橋で泣きじやくる僕とミナに手をふつていたけれど。

中島さんは過去に思いを馳せるように空を見あげ、やがて笑つた。やさしい、愛情に満ちた笑顔だつた。海岸線の西側で待機している子供たちの姿を、じつと見ていた。千晴さんはそんな中島さんの横顔を、おだやかなほほえみをたたえて見つめていた。

「俺の背中を見て大きく強くなれなんて言わない。将来、いくらでも俺をだしに言いわけができちまうからな」

そつと目を伏せて、中島さんはつぶやく。「そうじゃなくて、己の決断や意志に嘘偽りはなかったと自分自身に誇れる強い男になつてくれたら、というのが父親としての願いだな。たとえ結果が間違つていても、自分がこれまで生きてきて今もここに生きていることに間違いはないと胸を張れて、そして自分の力で軌道修正ができるように」

雨が降る。祭りのにぎやかな空気を読んだのか、今日はおだやかな小雨だ。空も海も落ちついていて、気温も比較的過ごしやすい。海岸でざわめく人ばかりを見て、僕は複雑な心境を自覚した。その正体が何者か、よく分からないけれど。

浜の数ヶ所にしつらえられた篝火台に炎がいつせいに焚かれる。ぞんぶんに油をふくんだ木材は雨の影響を受けず、空を焦がす勢い

で燃えあがる。その炎を合図に人々が傘をとじた。雨がさらに弱くなる。しかし雲の奥からは雷がとどろき、光をのぞかせる。

中島さんは両手を軽く振って「さてと」とつぶやいた。

「そういうわけだから、息子にかっこつけてくるわ」

おいおい言っていることが真逆じゃないのか、とツツコミをいれる前に中島さんは祭用の法被を豪快に羽織って雨の中に飛びだした。

一瞬、足元がふらつく。「大丈夫？」と声をかけたが中島さんは笑うばかりだ。練習のしすぎで寝不足なんじゃないだろうか。僕はため息をついた。

梯子を使ってやぐらにあがる彼を見て、千晴さんがくすくすと笑う。

「馬鹿な旦那でしょ」とても上品な笑顔だった。「でも、ああいう馬鹿は私も大好き。なんだかんだ言って、裕介にかまってあげてるし。頭が固くてお調子者で、自由人」

それでも私がベタ惚れだったの。そう言って笑う千晴さんに、僕も「分かります」と笑いかえした。

やぐらの大きな和太鼓が、ドン、とひとつ鳴る。天空の雷鳴に負けまいと、中島さんのふるう撥が皮をうならせる。僕は千晴さんと一緒に雨の中へ駆けだした。海岸沿いに集まって拍手を送る二百人ほどの島民の先頭に立ち、ジャケットの前ファスナーをしめる。ドン、ドン、ドン。規則正しい間隔で鳴らされる和太鼓。中島さんの奏でる島の胎動。

大太鼓の響きにあわせて、小学五年生の男の子を先頭にした子供たちの集団が観客の前に行進してきた。みな一様に同じ生地衣装を着て、大きめの木製の手桶を持っている。会場の中央に置かれた車ほどの大きさの水瓶のまわりをぐるりと囲み、手桶を空に向けて高々とかかげる。五歳から十一歳まで、島中の子供たちが集められ催される天雨祭。太鼓の音を合図にはじまる神への祈り。無病息災、世界平和、豊作、子供たちの健やかな成長。何百年も前と比べればはるかに変わってきた趣旨だが、信念は変わらない。年長の男の子

が高らかに祝詞をうたい、手にした手桶を剣のようにふるう。他の子供たちも一斉にうたいはじめる。昔の言葉なので意味は僕もよく知らない。ただ単純に、神への感謝の気持ちを言葉にただけなのだと思っているけれど。太極拳か能のような舞いを、水瓶を囲って踊る。おだやかに、しかし力強く、柔軟に。ミナは右端で踊っていた。人さし指と中指をそろえてぴんと空に向けて立て、僕をにらみ意地悪っぽく笑う。僕が吹きだすと、千晴さんも笑う。裕介くんはミナのすぐ前で、隣の年長の子たちを見ながらたどしく舞を舞っていた。声だけは一丁前にはりあげて、手桶を振りまわす。中島さんの太鼓に合わせて舞いはつづけられ、観衆から手拍子が鳴る。雷鳴が低くとどろく。

「ほんとだね」隣で手を打つ千晴さんがつぶやいた。「大人のほとんどが知ってるの。タカネノハナを、本土の人が何に使っているか」ヨーヤ、ソーヤ！ かけ声がかかる。子供たちは踊りつづける。

僕は「ミナがいちばん知リたがってます」と言った。千晴さんは笑って、「でも隆人くんだって変わらないでしょ」と肩をすくめた。

「薬よ。特效薬。東亜戦争のとき、大陸から華国の兵士がつよい感染症のウイルスを持ちこんじゃって、本土で一時期、爆発的に広まったの。致死率は七十パーセント強。詳しくは知らないわ。それに今のところ初期症状で対応できる薬になるのが、タカネノハナの種子」

太鼓が鳴る。僕はぎゅつと拳をにぎった。千晴さんはにこやかな笑顔で僕の肩をぽんと叩いた。かつて島の最北端で聴いたラジオのニュースを思い出した。僕は視線をそらした。

服がしつとりと内側まで濡れてきたころ、舞が終わり、中島さんの大太鼓が激しくうなった。ドドドドドドン、ドドドン、ドドドン。その重厚な音と激化してゆくリズムに客席から歓声があがる。僕と千晴さんは顔を見あわせて拍手をした。篝火にかこわれたやぐらの上で、法被の裾をはためかせながら大太鼓を叩く姿は猛獣使いのようだった。ききわけのない一枚の皮を叱咤するように、二本の

撥をふるう。ドドドドドドン、ドドドン、ドドドン。強い大太鼓の音に流れてゆくように子供たちが水瓶に駆けより、手にした手桶に中の水を汲む。天雨祭り前の一週間をかけて集められた島の雨水だ。僕らはこの水を「神様の涙」と呼ぶ。

ソーリヤ、ソーリヤ、ヨーヤ、ソーヤ！ 子供たちは神輿をかついでいるときのようなかけ声をかけ、観客のもとに走ってきた。全力疾走。逃げられない。大人たちは腰をひいて何事か叫びながらも笑っている。ソーリヤ、ソーリヤ、ヨーヤ、ソーヤ！ 声とともに手桶の水がめいっぱい島民の頭上にふりかかる。あちこちで叫び声があがった。僕は日ごろの恨みとばかりに突撃してきたミナに顔面から水をかけられ、鼻の痛みと悲鳴をあげた。笑い声がやまない。僕も笑いながらミナを罵倒したが、彼女もけられらと腹をかかえて笑うばかりで話にならない。裕介くんはよたよたと手桶を持って千晴さんのところへ走っていき、わざわざしゃがんだ彼女の頭に思いつきり水をぶちまけた。よくできたね、と笑う千晴さんに抱きあげられて裕介くんは楽しげに笑う。ドドドドドドン、ドドドン、ドドドン。中島さんの大太鼓が加速する。子供たちはつぎつぎと水瓶から水をくんで老若男女問わず目の前の人を水攻めにする。「神様の涙」を大量に浴びてびしょぬれになった島民は、誰もが笑い、あるいは爆笑し、逃げまどう。中島さんの大太鼓が鳴る。祭りはつつく。主役の子供たちによる雨水浴びが終わっても、夜が来るまでつづけられる。子供たちが舞い踊り、うたい、笑う。祭囃子が雷の音を凌駕せんばかりに鳴りひびき、僕はずぶぬれになりながら、手拍子をする。ミナは心底楽しそうに笑っていた。祭りの衣装を着て、最前列で伝統舞踊を踊る。雫を浴び、まるで神に祝福された子供のように。

初めてトトロの映画を見たのは小学校にはいる前だった。父親が持っていたVHSで、うつりの悪いテレビで。

ちいさいトトロ二匹を追いかけて草むらの中に突撃していったメイを見て、僕もあんな場所に秘密基地が欲しいと思った。ふと天蓋をみあげる。葉が多い茂って雨が届かないこのトンネル内は、薄暗く湿っぽくはあるが昼寝にちょうどいい場所だと思う。ミナがタカネノハナをひっこ抜きたいわくつきの場所なだけに、少しばかり遠慮はしたが。

地面にあおむけに寝そべると、微細な動きで風をとらえる葉が見てとれた。草と土と雨の匂いが優しくからみあう。風が意識を撫せてゆく。完全に機械都市化したという噂の日本の本州は、どこに行けばこんな香りと出会えるのだろう。行ったこともないのにあれこれ夢想する。

雨が弱くなるのが気配で分かった。僕はそつと目をとじて、どこまでつづくのか分かったものじゃない島の歴史を忘れようとする。きつとこの雨は二度とやまない。地球が崩壊してしまうまで、環境破壊がすすみ人類が滅亡するまで。あまりに足元がおぼろげなことに今、気づいた。背中から感じる土のやわらかさが慰めてくれる。枝つきれを持って走ってすっころんで泣いて、母が頭を撫でてくれたときとよく似ていた。

そうしてぼんやりとけだるい午後をすごしていると、ガサガサと草をかきわける音が聞こえてきた。半身を起こすと、土まみれの和明がトンネルの奥からひよっこり顔を出した。

「よう」

「よう、じゃねえ」

へっ、と笑われた。せつかくの昼寝の時間を妨害されておだやかだった気持ちが一気に下降し、文句のひとつでも言ってやろうとした。が、その前に和明が「タカネノハナってさ」と言い出したので口をつぐむ。

「薬になるんだってな」

「なんでお前がそれを」

「千晴さんと祭りのときに話してただろ」

聴き耳たてんなバカ明、と言うと、聴こえただけです、とかえされた。隣にごろんと横になった和明が、咳払いをして目を閉じる。「いざ聞いてみると、そんなだったのかよ、って拍子抜けしたな。もつとバイオ的な何かというか、SF映画みたいなのを期待してたんだけど」

「たかだか花に何を言う」

「こないだラジオでニュース聴いたときも、感染症って言葉が出てきてたもんな。あれ、そのことなのかも。まいったな、俺らが触ることすら許されない神の花が、特効薬に化けるなんて」

あー、とうめきながら天蓋に向けて手を伸ばす和明。僕もそのとなりにふたたび寝そべった。確かに、隠れている部分はつい暴きたくなつて躍起になるが、中身を知れるとどこかむなしさを禁じえない。あっけなさすら感じる。へー薬草の花ですかソウデスカ、という気分だった。致死率七十パーセントの感染症は確かに恐ろしいが、むしろあんなに華奢でかわいらしい花がそんなトンデモな病気に對抗できるんだという驚きのほうがよかった。毎日のように見ている僕らからすれば、確かに威厳を感じるが特効薬に化ける代物には到底見えない。純白の花びらはともすれば病院の壁を思い出すが。

太陽の光を浴びずとも美しく成長する花は、本土にわたつて初めて太陽をおがむのだろうか。そしてそれは、どれほど残酷で、幸福なのだろう。

「そんなに靈驗あらたかなものだとは思わなかった」

「だよなあ」和明が寝がえりをうって言う。「毎日毎日毎日、雨ばかり、雨ぐらいしか名物のない、万年梅雨まっさかりのここが神様に守られた島扱いってだけで噴飯ものなのに、そこにあるただの花は薬になるんだとさ。あっけねえ」

「あっけないというか、そんなもんかあつて思う。まあ、価値のほどは確かなんだろうけど。薬や本土の食べ物や本の代わりになるっていうんだから」

「もつとSFしてくれてたほうが、夢があつていいのに」

男の子してるねえ。そう言つと笑われた。

僕たちは一体どういう扱いをされているのだろう。本土にとってここは桃源郷と同じような、憧憬の目で見られていると言つがそこは「いやいやそんなお高いものじゃない」と手をふつて否定したい。いつぺん来てみるよと思う。きつと同じような落胆を味わわせることになる。

その桃源郷もどきの住人扱いされている自分の立ち位置を考えてみる。僕は僕が思っているほど高い場所にいるなんて思わない。墜落の衝撃が大きいなら低木の枝で昼寝をしているほうが楽だ。見知らぬ人間から、僕が自己評価している以上のものを僕の内部に構築されると、暴力的なまでに裏切られるよう仕向けてしまう。僕らにとつて本土は憧れだった。青い空が広がっていて、太陽がその真ん中で燦然とかがやく都市。ミナはいつも「こんな島にいつまでもいたくない」と口癖のように言っていた。本土から「ただの花」が求められる図式が、不思議だった。

それは誰もが子供のころから思っていて、おそらくはやがて大人になるにつれ薄れていってしまう感情。怒りにも似た自己防衛。

父親がいなくなったこともあるが、僕はミナの口癖と裏腹に何をどうやつても出られないこの島の鎖国つぷりとタカネノハナの求められつぷりの矛盾にいらだっていた。だから僕はいつも雨の下で傘をさして、ただ立ちつくしている。

千晴さんから真実を聴かされて、僕はどこか安心してたのかも知れない。

起きあがり、匍匐前進でトンネルをぬけた僕を和明が追いかけてくる。傘をさしてとなりにならんだ彼に「もしその話が本当だったら」と言つた。

「島の神様だかなんだか知らないけど、なんで水無孤島周辺の海は本土からの船を拒絶するんだよ。本土の人間は感染症でぞんぶんに死ねつてか。タカネノハナで特効薬ができるんだつたら、こつちも

下手に需要関係つくつたりしないでどんどん出荷してどんどん外交深めていったらいいのに、わざわざこの島の人間を閉じこめてる」「神に守られた島の、神の花だもんな。なんか思うところあるんだろ、神様にも」

「それに」僕はため息をついて、傘の柄をくるくるまわす。「やっぱりどつか気持ち悪い。雨ばかりで閉鎖的な島のただの花が、本土の人間から死ぬほど希求されてる薬になるなんて。俺たち人間じゃなくて、花だぜ。笑わせる」

はん、と鼻で笑った。和明は肩をすくめて「知らねえよ」と言った。

飽きるほど降る雨。じめじめして鬱陶しくて、太陽の光がいつさい届かない。一度でいいからぬけるほど高い青空を見てみたいと、何度でも願った。鎖島化以降生まれの子供たちはみな一様にそう言う。そして同時に、「この島にいつまでもいられない、いつかは本土とのつながりを復活させたい」とも。

神様は、僕らが思っている以上に厄介だ。

そして僕らが思っている以上に、この島はちいさい。

自宅の玄関で和明と別れ、傘をスタンドにぼうりこむ。「ただいま」と声をはりあげると居間で物音がした。障子をあけると卓袱台の前にミナがぺたんと座りこみ、腕にタカネノハナの鉢をかかえていた。花は少し元気をなくしている。ミナの髪はしつとりと濡れていて、服の表面にも雫が浮いていた。

「何やってんだ」僕はため息をつきながら彼女の背中を叩く。「雨に降られたのか。早く身体を拭けよ。風邪ひくから」

うつろな彼女の目が僕をとらえたとき、思わず息をのんだ。生気が失われ、下瞼には涙がうつすらと浮いている。声をかけようとすると、雫がぼろりと彼女の大きな目からこぼれた。

「お兄ちゃん」

そのかすかなつぶやきは、かつて海で聴いたときとよく似ていた。「中島さんが」

8 感染

病院の扉を蹴飛ばして中にはいると、すでに待合室に千晴さんと裕介くん、それに和明の母親までも集まっていた。他の島民も何人かいたが、僕は彼らをおしのけて母と祖母の前に出た。

「中島さんが倒れたって」

母は黙ってうなずいた。悔しそうに唇を噛んでいる。

「今、奥の部屋に隔離してるけれど、正直、そんなにもつとは思えない」

「なんだよ、なんで中島さんがそんな」僕は思わず声を荒げた。祖母に「よしなさい」とたしなめられたが、興奮しきって息が乱れる。僕の前に立ち、母はゆっくりと、自分自身を落ちつかせるように話しはじめた。

「隆人、よく聴きなさい。しばらく私も家に帰れないから。中島さんがかかったのはシエンロン熱。大陸の華国を中心に周辺諸国で流行している、シエンロンウイルス感染による出血熱。重篤化も感染もしやすいから、致死率もとびきり高い。だから、今は面会を許せない」

「シエンロン熱って、東亜戦争のときに日本に持ちこまれたウイルスのことなんじゃ。それなら、タカネノハナの薬を使えばいいだろ」僕が叫ぶと、母が目をみひらいた。なぜそれを、と無言で叱責していた。彼女が口をひらく前に、千晴さんが前にすすみでて頭をさげた。

「すみません、私が話してしまっただです。シエンロン熱のこともタカネノハナが唯一の抗ウイルス薬になることも」

千晴さんの声は震えていた。ハンカチで口元をおさえる。そりやそうだ、夫が死亡率の高い感染症にかかったとなれば、気丈に振るまうことなんてきつとできない。

僕だって内心混乱していた。確か、致死率七十パーセント以上。

どうしてそれに中島さんが。というか、鎖島状態の水無孤島にどこからウイルスが侵入してきたというのか。よりによってなんで中島さんにかかるんだ。死ぬかもしれないんだぞ、子供がまだ五歳だっているのに。これから小学校にはいるのに。

自分がパニックを起こしている、と自覚できるほどには落ちついていていた。しかし中島さんが置かれた状況を思えば、過呼吸になつてしまいそうだった。じわりとにじみでる汗を、胸元をつかんで耐える。

裕介くんは彼女の足元で、スカートの端をつかんでいた。まだ状況をよく分かっていないようで、あちこちをせわしく見まわしている。

子供たちに知らされなかったタカネノハナ出荷の目的が漏れたことを、母はさほど問題視していないようだった。彼女は千晴さんの肩を抱いて「大丈夫です、今はそれどころじゃありませんから」と言った。僕は母につかみかからんばかりの勢いで「タカネノハナを摘んできて薬をつくれば」と叫んだ。

「それができればとくにやってるわよ。だけど、この島の医療技術じゃあれを生薬に加工できないの」

「じゃあ、本土から薬を取り寄せればいい」

「もちろんそうしたいけど」母はため息をついて僕をひきはがした。「知ってるでしょ。本土との連絡手段はあのヘリだけ。しかも二ヶ月に一回しか来ない。つい一ヶ月前に一度来たから、次に来るのは最低でもあと二週間は待たなきゃいけない。来てくれさえすれば、こちらの要請ですぐにでも往復して薬を送ってもらえると思う。けれど」

そして彼女はごくりと唾を飲みこんだ。「おそらく、それまで中島さんがもたない」

身体じゅうの血がまるごと凍ったようだった。力が抜け、その場に尻もちをつく。祭りの当日、足元がおぼつかなかったのはまさかその初期症状だったのか。そのうちに検査していたら、本土の病院

に行つていれば。タラレバは何にもならないと分かっているが、禁じえなかった。全身の糖分が一気に沸騰して降下してゆくような感覚に支配される。

僕は立ちあがつて廊下の奥へかけだした。待ちなさい、と母がとめるが無視する。最奥の部屋、めったに使われない鍵付きの隔離部屋の壁にはりついた。全面ガラスになっていて室内のようすがうかがえる。中島さんは中央の真っ白なベッドに横たわつて、体中にあらゆる点滴のチューブをつながれていた。高熱を出しているのか顔が赤く、呼吸も荒い。傍目にはひどい発熱にも見えるが、異常だ。ときおり痙攣を起こしているのか胸が跳ね、そのたびうめき声をあげている。

「中島さん！」

僕はガラスを両の拳で叩き、力の限り叫んだ。「息子にかつこつけるとか言つといて、なんでこんなざまになつてんだよ。らしくねえよ、ふざけんな、自分の言つたこと思い出せよ。理不尽すぎるだろうが。千晴さんと裕介くんに心配かけやがつて、死んだら絶対許さねえからな。背中見せんな！」

母と祖母がやってきて僕の手をおさえつけた。千晴さんが右手にしがみついて「もうやめて、隆人くん」と涙声で叫んだ。僕はガラスに額を押しつけてそのままずりりと崩れ、しゃがみこんだ。爪が食いこんで血がでるほど拳をにぎり、力まかせに床を殴った。「ちくしょう」

裕介くんがよたよたと歩いてきて、僕のとなりで泣きだした。おきな声をあげて、顔を涙と鼻水でぐしゃぐしゃにして。「お父さん、死んじゃ嫌だ」僕は彼を力のかぎり抱きしめた。五歳のちいさくあたたかい身体は、背負うには重すぎる闇に圧迫されて今にも折れそうだった。僕は裕介くんの頭を右手でつよくつかんで歯をくいしばった。

医大、医局、大学病院とずっと勉強をつづけてきたという母と

祖母は、その蔵書量も半端なかった。床を殴って痛めた手の治療を終え、自宅に戻った僕は母の書庫に行き、床が抜けるかと思うほど大量にある医学書を、本棚から手当たりしだいにはじき落とす。本棚は奥行きがあるので奥と手前、二段になっている。手前の列にはどこにも薬草の本がなかった。背表紙の上に指をかけてバサバサと本を床に捨ててゆく僕を、部屋の入り口でミナが見ていた。

「お兄ちゃん、きっと無理だよ。タカネノハナの加工法は、お母さんが島に戻ってきてからできたんでしょ」

「それでも」僕は勢いあまって顔を直撃した本をほうり投げて叫んだ。「既存のデータで補える部分があるかも知れない。タカネノハナは生薬になるって母さんが言ってた。だいたいあんなもん、工程は決まってる。この島の医療技術じゃ加工できないなんて嘘だ」

ぶあつい薬用植物学の本を手早くめくり、索引にタカネノハナがないと分かれると舌打ちして床に捨てた。そもそもシエンロン熱に対応しうる薬剤の情報がほとんどない。大陸ではやったとはいえ日本には持ちこまれた例がなかったのだ、当時だって文献をそろえようにも困難を極めたのだろう。まして発生源である華国と戦争中だったのなら。

ミナは僕をじつと見ていた。僕があきらめるまで見ているつもりらしい。そうはいかんと必死になって東洋医学の本をくつたが、今の僕らでは技術的に不可能な加工が多く、厳密な処理をしなければ逆効果になりうることも思いだして、最後の一冊を床にたたきつけた。その上に崩れ落ちるように腰をおろし、頭をかかえる。

万策尽きたのか、と、絶望が双肩にのしかかる。これだけたくさんのタカネノハナがあるのに、肝心の僕らに何もできないんじゃない。

リナはゆっくりと室内に入ってきて、僕のとなりにちよこんと正座をした。僕は彼女の頭を撫で、ついで腕にかかえているタカネノハナのちいさな鉢植えを見た。花は何も語らず背筋を伸ばし、自慢の純白の花びらを誇らしげにひろげていた。悲しみの涙を一滴たりとも流さない花。自分のおかれている状況を何も理解していないよ

うに見えて、何もかもを把握しているような色。ミナは泣きだした。泣きながら「ごめんなさい」と連呼していた。僕はうなだれて、拳をにぎった。

中島さんの一件があつてから、島全体が静かになった。雨も荒れることなく、島民も必要以上に外出しなくなった。病室には毎日ようすを見に行つたけれど、中島さんの病状は悪化する一方だった。話しかけても少しずつ口数が減り、僕を見ても「よお、元気そうじやねえか」とばかりに子供っぽく笑うだけになってしまった。滅菌室を出るといつも、白い壁に囲まれたプールに放りこまれたような気分になる。和明はいつも僕のお見舞いについてきて、くだんのようにしょぼくれる僕の背中を叩いてくれた。

化学療法でなんともかなるものじゃない。タカネノハナがないと。母はいつもわごとのようにつぶやいていたが、僕はそれを聴くことができな。気がつけば一週間が光の速さですぎてゆき、学校は夏休みに入った。宿題なんて、やる気になれなかった。

僕が千晴さんに呼ばれたのは、けだるい夜を三国志の本を読んでつぶしていたある日のことだった。

官舎は駐在所と併設されていて、海から少し遠く波音がうるさくない。時計の秒針の音がやけにおおきく聴こえる静寂の中、子供部屋から出てきた千晴さんが障子をひらく音はことさら僕を驚かせた。彼女の足元では裕介くんが腰にタオルケットをかけて眠っている。電車の模様が描かれた寝間着は、線路がぐるりと彼の身体を縛っているようだった。

千晴さんは卓袱台をはさんで僕の前に正座する。つられて僕もあらから正座へくみなおした。柱時計は夜九時をしめている。ついさっきまで膝にのっていた裕介くんは絵本を読んできかせていたことが信じられないほど、静かだった。「するとつぜん、ねずみばあさんのこえがそらからふってきました」話を最後まで読み終わ

らないうちに眠ってしまった裕介くん。来年は小学生なんだということを感じさせないほど、幼い子供。

昼間、中島さんのシエンロン熱発症に際し、母の病院で島民全員の採血と予防接種が行われた。とはいえ、まだシエンロンウイルスの正体がつかめていない今、気休め程度のワクチンしか備蓄がないが。今のところ、感染は拡大していない。

ウイルスはヘリで送られる食べ物を媒介として感染したとは思えない。検閲をくぐってまで上陸をこころみたその生命力には感服する。母を手伝いながら何度も何度もため息をついていた。

ぬるくなってしまった湯呑みのお茶をひと口すると、目の前で千晴さんがため息をついた。その一瞬一瞬が艶めいている。

「馬鹿な夫だと前からずっと思ってたけど、あれはちよつと馬鹿すぎるわね。はやいとこ言えばいいのに、意地はっちゃって。本人は寝不足か何かだと思ってたんでしょね。連日、寝食忘れてお祭りの練習にはげんでたし」

僕は何も言えなかった。何を言っても彼女を傷つけてしまいそうな気がした。

「今日、病室に入って少し話をしたわ。裕介と私、そして島民全員にウイルスは感染していなかったって言ったら、ちよつとだけ笑って。あまり話せないのに、よかった、ってつぶやいたのよ。馬鹿でしょ。俺が死ねばもう大丈夫、なんて言うのよ。ほんと、馬鹿」

シエンロンウイルスは宿主である人間と共存し、人間の死は自身の死を意味する。逆を言えば確かに、中島さんが死ねば感染拡大は食い止められる。

だが。

「そんなこと」

もう一度病室に行つて、眠る中島さんの顔面を蹴り飛ばしたい。千晴さんは正座を少し崩して上体をひねり、戸棚から水色の布きれを出した。袋状になっていて、上部の口を紐で絞れるようになっている。表面には新幹線の不器用な刺繍がほどこされてある。

「裕介のお弁当箱入れだつて」

さしだされるまま僕はそれを受けとった。いかにも手作りという感じの、ところどころ糸がはみ出している、縫い目もまちまちで決してきれいとは言えない巾着袋。一瞬は首をひねったものの、すぐに合点がいった。

「倒れる少し前にくれたの。半年後の入学祝いのつもりなんでしょ
うね、本人は」

僕の前で布と針を隠してしまった中島さんの姿が思い浮かぶ。写真でしか見たことがない電車や新幹線にあこがれている裕介くんのために、得意でもない刺繍をする。だから千晴さんに内緒でミナに教えてもらっていたのかと。

ああ、蹴りたい。僕は深くうなだれた。今すぐ中島さんをぶつとばしに行きたい。

巾着袋を千晴さんにかえすと、「うちの馬鹿な妹が」ときりだした。

「タカネノハナをひっこぬいて、部屋の窓辺に今も飾ってるんです。罰当たりなことに」

「あらあら」千晴さんはほんとうに丁寧に笑う人だ。「何も悪いことなんて起こらないでしょ？」

「はい、なんにも。ただの花でした」

「誰かにとつての神の花だとしても、実態はそんなもんよ。大仰に高嶺の花扱いされてたつて」

千晴さんはそつとため息をついた。「シェンロンウイルスの特効薬に加工する技術がなけりゃ、何百年もあればただの花のままだったのよ」

「人命を救う薬になりうるなら、それは別の意味で神の花となるんじゃない」

「そう思う？」

そもそもの神の定義は何かしら。千晴さんは悲しそうに言った。人ひとり死にそうなのに助けてくれない。そんな神様に守られた

島。

すべてにおいて干渉せず、見守っているのかどうかも怪しい、しかしこの島を箱庭たらしめている。その神の花は、ここに生まれたときからずっとただの花だったのに、この二十年ぼっちで突然おおきな意味を成す存在になりかわった。それと同時期に封鎖された島が、本土の教科書に載っている。

昔の人は、何を見てタカネノハナを神の花呼ばわりしたのだろうか。

もし、と僕は思った。ミナの手によって大事に育てられているあの花が、中島さんの命を救うなら、妻の千晴さんや息子の裕介くんにとって、花の意義はおおいに異なってくるだろう。神が不在でも、誰もその名を口にしなくなったとしても。

そして奇跡的にその時期が来ても、この島は変わらず雨ばかりなのだろう。

僕は湯呑みのお茶を一気に飲みほして、ごちそうさまです、と言った。それを台所の流しで洗い、上着を着る。

千晴さんに呼びとめられて玄関でふりかえった。右手首をつかまれる。

「あなたのお父さんは、私欲のために動く人じゃなかったわ」彼女は強く僕の手をつかんで離さなかった。「あれは本気だったのよ。あなたたち兄妹に青い空の写真を見せたかったっていうのは。興味本位なんかじゃなかったの。本気で、この島をもう一度日本本土とつなげようとして」

だけど、とつぶやく千晴さんの声は震えていた。泣きだしそうな表情をしていた。

僕がまだちいさいころ、千晴さんと中島さんが港の桟橋でささやかな結婚式をあげて、しあわせそうに笑っていたことを思い出した。みんなに祝福されて、永遠の愛を誓って。そのとき、僕の父は中島さんにシェイクしまくったビールをおみまいしていた。そのときのふたりの爆笑っぷりは、今でもはつきり覚えている。

一瞬はとまどったが、すぐに僕は千晴さんの手を払い、「中島さんのそばにいてあげてください、親バカだけど妻バカも兼ねてるんで」と言って笑った。

「そこまで後先考えないやつじゃないです。父親の背中を見るなっ
て言っただの、あなたの旦那さんですよ」

千晴さんはもう何も言わなかった。外に出ると、いつもと同じ表情の空からなおも雨が降っていた。

9 船出

駐在所の官舎がある丘からは、島の反対側にある水力発電所の屋根が見える。北の神社に参拝しようかと思ったが、やめた。村落をゆつくりと南側へくだりながら、周囲の景色を見ていた。ただひたすらに山、林、木、雑多な茂み。田畑によく似合う古い家屋の数々。児童公園と併設された保育園。鎖島化以前まで営業していた観光客向けの民宿。公民館。墓地。島民のお年寄りたちが集まる食堂。道端にぽつんと立つお地蔵さんと、その前に置かれた花と割れた湯呑み。今にも朽ちてしまいそうなベンチと、それを雨から守る大きな樹。子供たちがよく缶蹴りをして遊んでいる更地。閉店したが看板がそのまま残っている煙草屋。診療所にはまだ電気がついていて、母も祖母も忙しいのだと分かる。無病息災を願うはずなのに、天雨祭のあとは風邪や発熱の患者が多い。

町をなぞるように東側へおおきくカーブした道をくだっていると右手に海がおがめる。小雨の絶えない島の、静かな海。つながれたたくさんの漁船。船客の待合所が棧橋のそばにしつらえられ、海の機嫌をうかがうようにぽつんとちいさなあかりがともされている。

夜闇が眠りから目覚めるように、少しずつ荒れはじめる。風がつよくなり、雷鳴がとおくで鳴りひびく。嵐の前兆。小雨が徐々に顕著な大雨になり、傘からつたわる振動が現実味を増す。もしかしたら雹に変わるかも知れない、という予感はあるが遠くからずだった。雨は季節外れのみぞれにかわり、僕は港を走ってつきた。船客待合所のドアを力いっぱいひいて、雨から逃れるように中へ転がりこむ。すでにベンチに座って待っていた和明が立ちあがり、僕の手から傘を奪った。

「ほら見る、本当に荒れてきたじゃないか」

その言葉に笑ってこたえた。どうやら神様はいるらしい。僕の船出を知っていて、箱庭から出るんじゃないとこうして警告を送る。

父が船を出したときとまったく同じだった。みぞれが混じった雨に、不規則に吹く強い風。ぼんやりしていたら波にさらわれて一気に海へひきずりこまれそうな、自然の脅威をあらためて思い知らされる嵐。港育ちでないと分らない、海の恐ろしさ。

和明はポケットから出したものを僕の右手のひらに乗せた。米軍基地の遺物、旧式のラジオ。あいかわらずの汚れっぷりは健在だったが、電源を入れると雑音が流れるばかりとはいえきちんと機能する。僕はそれをつよくつかみ、「ありがとう」と言った。

おそらくもう使うことはないだろう僕の傘をくるくるとまわしてたたみながら、和明がため息をついた。

「今ならまだ引きかえせるぞ。俺、お前の親父さんが島を出たあのとき以来はじめて見たよ、こんな変な嵐。なんで真夏にみぞれが降ってくるんだよって感じ」

「この島の気象とか自然について疑問もちはじめたら永遠にとまらねえって」

何千年も雨が降りつづいている時点で、すでに既成概念を超越している。普通なら地盤がゆるみ、島が溶けて消滅していたっておかしくない。

僕は手の中のラジオの電源を切って、「それでも」と言った。

「中島さんが死ぬのは嫌だ。誰もこの島を出ようとしなかったら、俺が行くほかないじゃんか」

「だから俺もって言っただろ。俺だって、中島さんに死なれたら困りすぎる」

「泳げない和明くんは地べたに這いつくばってなさい。母さんやミナに訊かれたら、なんか適当にうまいこと言っというて」

「その適当についていうのの適当なテンプレートくれるとありがたい」
「俺の言葉なんか使わないほうがいいって。千晴さんには嘘ついてきたから、余計に言いわけめいてうしろめたいし」

「ラジオをわざわざここまで持ってきた俺にそれ頼む？」

「和明だから言うんだよ。ミナ、絶対泣くから」

タカネノハナの鉢植えを、逃がすまいとしつかり腕にかかえて。断固としてひきさがらない僕を見て、和明があきれたようにため息をついた。「遺伝だな」と、これまであまり聴きたくなかったことを言われる。が、しかたない、僕はあの無邪気なおっさんの息子なんだ。

雨はさらに激しさを増す。波が高くなり、栈橋を押し流さんばかりにのりあげる。つながれている船のいくつかはすでに転覆目前だった。普通ならすべての船が港へひきかえし、家々は雨戸をしめてしまふスコール。それがむしろ好都合だった。

村役場からロケット信号弾が打ちあがる。かなりの高さまであがると、花火よりはるかに大きい爆音が連続して周囲にひびいた。赤い煙が発生し、嵐の警報を島じゅうに伝達する。待合所の壁がすかに振動している。僕はそのどさくさにまぎれるように出入口のドアをひらいた。背後から和明が「忘れんなよ」と叫んだ。

「掃除当番、まだ一ヶ月ぶんやってもらってないんだからな」

むけられた手のひらに、僕は笑って拳をふるった。和明は馬鹿みたいに笑っていた。僕は港の一番端に係留されている、滅多に使われない中島さんの船を使うつもりだった。

雨は完全にみぞれに変わり、くそ暑い水無孤島の夏空が氷点下であることをやかましいまでに知らせる。僕は背負っていた登山用のリュックをおろし、栈橋からいきおいよく投げた。弧を描いてリュックは艀甲板に落ちる。波がうちよせる栈橋を走って助走をつける。上摺に手をかけ、波除を蹴って飛び乗る。とたんに船が揺さぶられて甲板にたたきつけられたが、そんなことをして遊んでいる場合ではない。すぐにビニールシートをはずして操縦席にはいり、さっしばなしのエンジンキーを回す。時間がないので、燃料、クラッチ、補助エンジン、航海灯などをおおまかに点検する。船舶操縦士の免許など持っていないが、港育ちで漁師の子だ、素人よりは分かる。森の葉擦れの音が子守歌なら船はゆりかご同然だった。

舳いロープを開放し、いざ出航というとき、遠くから自分の名前

を呼ばれている気がしてふりかえった。いよいよ波が港ごとさらお
うかと勢いを増してきているというのに、棧橋を走ってくる利香。
僕はあわてて船から身を乗りだし、「何やってんだ」と叫んだ。

「信号弾出ただろ、家でじっとしてろ。なんでここにいるんだ」

「こんな嵐、どっかのバカが島を出ようとしてるとしか思えないじ
やない。そういうそつちこそ」

「俺は見てのとおり、本土に行く。タカネノハナの薬を持って、ま
た戻ってくる」

「戻ってこれると思ってるの。そもそも、上陸なんて」

「できるかどうかなんて、海に出ないと分からないだろ！ 俺の親
父だって、生死すらはつきりしてねえのに」

船がぐらりと揺れ、海に落ちそうになる。あわてて上体をささえ
るが、利香が海水をまるごとかぶったらしくびしょぬれになってい
た。雷鳴が笑うようにとどろく。

「いいから早く帰れ」僕は口に入る塩水を吐きながら叫んだ。「棧
橋に立ってたら、流されるぞ」

「どうして、どうして隆人は本土に行こうとするの。死ぬかも知れ
ないんだよ？」

「俺はこの島に縛られるのが嫌ってわけじゃねえし、本土にめっちゃ
くちや憧れてるわけでもねえけど、でも今は、自分のことをいち
ち考えていられるような余裕ある状況じゃねえんだ」

利香は今にも泣き出しそうな顔で「でも」と叫んでいた。「でも
じゃねえ」と叫びかえした。

本末転倒になってしまいかも知れない、という危惧がないわけじ
やない。けどそんなことで議論している暇はない。

不規則に変わる風向きのせいで波が読めない。雨が四方八方から
僕らを邪魔する。さらに高波で船が揺れ、上半身を船の外に投げだ
された。転落しそうになるのを両腕で必死に耐え、顔をあげた。利
香が棧橋から「無茶だよ」と叫びながら僕に手を差しだしている。
知らないわけがない。

その手を僕はつかまなかった。「幼なじみっていうのも、知られすぎて面倒だな」とつぶやく。

ふたたび操縦席へ立つ僕を、利香が見ていた。何か叫んでいるようだったが、雷鳴にさえぎられた。僕はその隙間を狙って「戻ってくるって言ったろ」と怒鳴った。

利香はその場に泣き崩れた。僕は高波の飛沫をもろに浴びながら、前を向いた。

自然に切れたものもふくめすべてのロープを開放した船のエンジンを、嵐の中無理やりかける。本来出る幕ではないスコールに棹をさすような漁船のペラはたよりないが、なんとか離岸はできそうだった。栈橋で僕のことをずっと見送っている利香のちいさな姿を見て、僕は笑って手をふった。かつて無邪気なおっさんがそうしたように。

岸から離れると前進にきりかえ、海との真っ向勝負に出る。風と波が強すぎてほとんど舵がきかなかった。船のまんなかでまっぶたつに割れてゆく風。すこしでも舵輪から手を離せばうしろにふつとんでしまいそうだった。島から軽く二キロは離れたかというとき、ふとふりかえると僕はため息をついた。

水無孤島は、ただの島だった。

中央がぼっこりふくれたような山と、港と村落。

ガガーリンが地球の青さと神の不在に驚いたように、僕は水無孤島という未踏の桃源郷がどこにでもありそうなただの島だということを知った。守っているはずの神も見あたらなければ、靈験あらたかなオーラも、ない。嵐の中に浮かぶ、ごく普通の島だった。

僕はこの島で生まれ、縛られ、育った。

僕は水無孤島の外観を目に焼きつけようとした。父も同じような気持ちで船の上からふりかえったのかも知れないと思えば、急にこれまで忘れていた郷里へのシンパシーが湧いてきた。だけど、もう後戻りはできない。

舵輪を持つ手が震える。今、僕は水無孤島の海域にいるのだ。口

デオのように揺れる船体に必死にしがみつき、全速前進でフルスロットル。すでに全身はびしょぬれだった。とにかく島から一キロでも遠くまで。ただその一心で僕は舵をきった。先日、床を殴ったときに痛めた手に激痛が走ったが、かまっていられる余裕はなかった。一瞬でも手を離せば操縦席から落下し、甲板に叩きつけられるか、最悪の場合海に転落する。

僕は右手で舵輪をにぎりしめ、左手で和明のラジオのスイッチを入れた。あいかわらず雑音しか流れない。だが雷鳴の隙間をぬうようにその雑音がたまにとぎれるのを、僕は聴き逃さなかった。まだ何の番組なのか、音なのか声なのか、それも分からない。僕はラジオのポリウムを最大まで開放し、ズボンのポケットに入れた。

何十分もロデオ状態だった船が徐々に落ち着きをとりもどしはじめ、波もおさまってきた。あれ、と拍子抜けしたのは僕のほうだ。バラバラバラツ、と飛沫が操縦席をたたく音がやけに鮮明に聴こえた。まさかたった十数キロ離岸しただけで嵐がなくなるのか、と僕はあせった。まさかそんなはずはない。十八年間、何隻もの調査船をこの海にしずめ、何びとたりとも上陸を許さなかったスコールだというのに。

ふわり、と船体がかかるく沈み、ちいさな水しぶきをあげて安定する。順風満帆。潮風に背をおされるようにゆるゆると丘のような波を越えていく船に、僕は半速前進にきりかえた。座標と海の気分がつかめない。鎖島化以前に計測された情報が正確なら、北北東へ七十キロ前後で和歌山県潮岬に到達するはずだ。一日そこらで着くとは思わないし転覆するのが先だろうとみていたが、もしかしたら、という一縷の期待が脳裏をよぎる。

僕は右舵を一杯にきった。これで雨がやみ、波が安定さえしてくれればと思ったが、どうやら神は僕を泳がせてはくれなかったらしい。

狭い盆地の合間を縫うように先へ進んでいたが、突然、空気を送りこんだように目の前の水面がなだらかに膨れあがり、それは僕が

のけぞって見あげなければならぬほど高い、高い山になった。どこかとおくの雷光がすけて一瞬美しくかがやく。圧倒される。船体が波の足元へひきずりこまれる。回避せねばと舵をきろうとしたが、一ミリも動かない。やばい飲みこまれる、と思った瞬間にはすでに波は端からくずれはじめていた。ドミノが倒れるように、白い水しぶきをあげて。

強い力で波へひきずられてゆく船が、徐々にうしろへかたむいてゆく。両足を強く踏んばるが、手も足も水ですべる。

必然的に上を見あげる体裁になった僕の目に、竜が見えた。

有刺鉄線でかこわれた楽園の、主。僕らが神様と呼んで納得していた存在。

その大津波の中腹で、水無孤島を一周できるんじゃないかというような巨大な竜が、しずかに、何も言わずにちいさな僕をみおろしていた。その目は黄金にかがやき、人間をはるかに凌駕する。鉄壁のような鱗に、巨木じみた角。地球をまるがかえしてしまえるほど長い尾。僕は絵本の世界にいる気分で、その竜の目を見ていた。誰も責めず、誰も救わない、威厳は確かにある存在。彼の宝玉のような両目を、僕は無言でにらみかえた。

さまあみろ、とあざ笑いながら。

土のにおい。葉擦れの音。降りつづく雨。胎動のような雷。純白の花。

神様に守られた島。

ズボンのポケットに入れていたラジオがとつぜん、波音に負けじと電波を受信した。拍子抜けしたそのスイング・ジャズのBGMと司会者の声に驚き、その瞬間、雨で濡れた手から舵輪が抜けた。ほぼ垂直にかたむいていた船からすべりおち、まっさかさまに落下する。冷たい海に投げ出されるその瞬間までの数秒間、ラジオから出演者たちの陽気なトークが僕の耳から離れなかった。

く――……そうですね、当局には打つ手がないですよええ。ヘリに

人間を乗せたら強風にあおられて上陸不可能っていうんですから、本当に鎖国状態ですよ。ええ。地上に残された最後の楽園とでも言いましょうか。前代未聞ですよ、あれほどまでに自然が残っていて、まして雨が地盤に影響しないなんて。そうですね。だからこそ、神の島なんていう言い伝えが信憑性を持つんでしょう。しかし楽園というより、箱庭ですね。こう言っては悪いですが、愛玩動物みた……すよ。かわいい……を檻で飼……うな……かし彼らにとってはおそらく、日本本土が楽え……のでしょ……ん後の課題と……を――>

八年前、父が水平線の果てへ去ったあと、母が言った。

「いい？ ミナ、隆人。この島は神様に守られた島だけど、神様はここにしかないわけじゃないのよ。神様はどこにでもいるの。どこにでもいるし、すべての人の心の中にいるの。だから、決してこの島だけが特別なんじゃないの。そのことをよく覚えておいて」

父の背を見送ったばかりでまだ涙もかわかない僕らに、母はさらに語った。

「神様は乗りこえられる試練しか与えない、なんていうのは嘘。理不尽ありきの世界だし、試練は神様が主体じゃない。神様は誰も助けない。与えられたのは、試練を乗りこえるための勇気とか、力とか、乗りこえたいって思うようになる強い気持ち。そしてそれは神様の力がひきだすものじゃない。自力で表にひっぱりだすものなの。ミナも隆人も、島の神様にお祈りしなさい。私たちの心に、私たちの唯一信じるものをくださいって」

その言葉を聴いた瞬間から、僕は弾を限界まで込めた拳銃を自分の腰にさしていたのかも知れない。それがたとえエゴだったとしても、僕は常に自分の中にいる神様の存在を信じるようになった。信じた末に何が残るかを考えずに、ただ一途に。

本土からやってくる巨大な無人ヘリコプターを見るたび思う。襲撃されているような気分だと。だけどそう思わせているのは、ヘリではなく、僕だった。

雨ばかりの島。他には何もない、ただの島。手つかずの自然と古い日本の生活様式がそのまま生きていて、美しい花が咲く島。この島で生まれ育っていながら、島の神様への同情を禁じ得なかった。悠久の頬笑み。禁断のリングをそのまま丸かぶりする、自由。

10 夜空

何かを追いかける夢を、見ていた。気がする。

だがそんなものは目がさめたと同時に、一瞬で瞼の裏から逃げ去ってしまふ。うつすらを目をあけるとその瞬間、除夜の鐘を頭蓋骨の中で鳴らされているような激痛が頭部全体を襲った。海の上をボートでたゆたっているような目まいがする。思わず歯をくいしばり、頭を両手でかかえた。脱水症状、と僕は即座に判断できた。海水を大量に飲みこんでしまったのだらう。

自分がベッドに横たわっていることに気づいたのはその数秒後だった。肩までかけられた毛布の中で震える右手を必死に動かし、ベッドの端に手を伸ばした。何度かあちこちをさぐっていると、ぴたりと冷たい感触に触れる。目を凝らすとそれはサイドテーブルに置かれた、透明な水の入ったペットボトルだった。実はペットボトルというものを僕はこのときはじめて見たのだが、そんなことは眼中になかった。僕はすぐさまそれを手にし内容液を一気に飲み干した。甘みがあるが、味はほとんど分からない。紙のようだった喉が徐々にうるおい、気持ちが落ちついてきた。無心にミルクを追う子猫のようにボトルの中身を飲みきると、ひととおり咳きこんで、ふたたびベッドにそのまま倒れる。枕元に空ボトルがころがる。咳のしすぎで顔が熱い。頭痛はまだ消えない。すこし高めのやわらかい枕が、そんな頭蓋骨を丸ごと包んでいるようで心地良かった。

そこまできてようやく、ここはどこだろうと思った。ああむけになると、病院のような白い天井が見えた。六畳ほどの部屋に勉強机や本棚、クローゼットなどが配置されてある。壁にはアイドル歌手らしき少年のポスターが大量に貼られ、床にはお菓子の袋や脱ぎ捨てられた服や雑誌がちらばっていた。机の上には僕が本でしか見たことがないパソコンが鎮座していて、枕元には帳面ほどの薄さの大きな四角いプラスチックの板もある。

どこだろう、ともう一度疑問をめぐらせた。頭がうまくはたらない。空になったペットボトルをふたたび手にし、ラベルの主成分表示と解説を読んだ。ただの純水かと思ったが、電解質やミネラル分やブドウ糖を含み、効率よく水分を補給するためのスポーツドリンクのようだった。それならそれでいい、と僕は枕に顔をうずめた。今はとにかく休みたい気分だった。ここがどこかは、誰かが来たときに訊けばいい。

が、そのときは思いのほかすぐにやってきた。壁越しに誰かが話す声がかすかに聴こえ、それはドアがひらく音と共にダイレクトに耳を直撃した。きやははは、というかん高い少女の声。頭に響く。僕が耳をふさぐべく身じろぎすると、少女は「あ、なんか起きてるみたいだから、ちょい話してみるわ、あとでまたメールする」と言っただけで沈黙した。ベッドに座り、僕の顔をのぞきこんでいるその気配。香水のやわらかな匂い。「うわ、あたしのポカリ全部飲んじゃったんだ」とつぶやく声が聴こえる。僕は目を半分だけあけた。

すりガラスをとおしているようなぼんやりした視界の中、掘りが深くみえる化粧をほどこした少女が、僕の顔にかかる長い髪を払いもせずにこちらを見ている。唇がいやに艶めいていて色っぽい。だけど僕とほとんど変わらない年頃のようにだった。彼女はさもおもしろそうに笑い、「大丈夫？」と言った。

「君は」

そう声にした途端、砂漠の砂をいっぱいに含んだように口内がきしんだ。眉をひそめる僕を見て、少女はさらに笑う。

「あたしは日本人よ。地球へようこそ。観光？」

現在地をたずねると「日本の和歌山県だよ」と少女が言う。僕はそこでようやく、ここが大日本共和国の本土なのだと認識した。津波に引きこまれた船がひっくりかえり、そのまま海に落ちたことを思い出す。「そうだ、俺」とあわてて上体を起こそうとすると立ちくらみがし、結局枕に轟沈することになってしまった。おもしろが

って彼女が笑う。僕は島に残してきたミナ、母、和明に利香、千晴さんと裕介くん、そして誰よりシェンロン熱にかかった中島さんのことを一気に思い出し、起きあがらねば、と思うが身体がいうことをきかなかった。焦慮に冷静さを奪われまいと、ゆっくりと深呼吸をした。どうして海に落下したのに本土まで流れ着いたのか、そのことについては今は考えないようにした。

本土に今、来てるんだ。その信じがたい現実に興奮し、顔を両手でおおった。十八年ものあいだ、誰も脱出できなかった水無孤島を飛びだして、本土に上陸したんだ。その達成感と疲労とで頭がぐちゃぐちゃだ。体力があって頭痛がなければ今すぐ小躍りしてよろこんでいた。

「いよっしゃああああ」

喉の渇きと頭痛をも凌駕し、かすれた声で叫ぶ。

多分たくさん海水を飲んだ、と言うと彼女は部屋を出て、二リットルサイズのペットボトルをかかえて戻ってきた。「こんなんで大丈夫なの」と首をかしげる彼女にうまく説明ができず、とにかく早くこの頭痛と決別したいと中身のスポーツドリンクをめいっぱい飲んだ。一時間もそうしていると体調が安定し、ベッドに半身を起こせるようになった。

ぐらつく頭をおさえながら、彼女の笑い声を聴く。

「なんだ、地球人だったんだ。浜辺で倒れてるから、てっきり空から飛来してきた宇宙人が着陸に失敗して、流れ着いたのかと」

「そういうのって、小説とかだとたいいてい、船が沈んで漂流してきたとか思わない」

「小説なんて読まないもん、あたし。字ばっかで読む気しねえし」
近所の浜辺の岩場でぶつ倒れてるから、うつわ今どき何こいつって思って連れて帰ってきたんだけど、漂流してたんだ、へえ。

そう言う彼女の声はすきとおっていて、だけど色っぽかった。ひとり暮らしらしく、騒いでも彼女以外に誰も部屋に入ってこなかった。

彼女はツヤナと名乗った。どういう字を書くのかとたずねると、彼女はかわいらしいストラップが大量にぶら下げられた手のひらサイズの端末機を指先で叩き、僕に画面を見せた。真っ白な画面の左上に「艶菜」という文字が立体的に浮かんでいる。

「その機械は」

「やだ、ケータイも知らないの。ケータイつか、 아이폰 だけどね。早い話が持ち運びできる電話、というかパソコンに近いかも」

「携帯電話は知識として知ってるけど、俺の認識では、もったこう」僕は両手の手首をくっつけ、ぱたぱたとたたむ動作をした。艶菜に笑われ「そんなの何十年前のケータイだよだっせええ」と馬鹿にされた。

「漂流してきたっての、嘘なんじゃないの。隆人くんって実は過去からタイムスリップしてきたとかそれ系の人じゃないの」

「違うって、俺は」

水無孤島から来た、と言う前に艶菜は枕元にあったプラスチックの巨大な板の上部に手をかけた。とたん、漆黒の表面に映像が浮かび、音声が流れてきた。「うわっ」と飛びのいたのは、その薄い板がテレビだったという事実を知らされたことにくわえ、映像が立体的に見えたせいだった。ニュース番組でうつしだされたどこかの戦地の映像は、兵士ひとりひとりや砂埃までもが手前に飛びだして見える。僕は思わず画面の前に手をやって、立体の建物に触れようとした。が、それは空気をつかむばかりで実体を成さないものだだった。ごく普通の日常の動作としてテレビの電源をいれたにすぎないらしく、艶菜はあきれたように「馬鹿みたい」と笑う。

「 아이폰 も知らなければスリーディーテレビも知らないか。この調子だとパソコンなんてもちろん使えないだろうね。えらく原始なところから来たんだね」

「テレビなんて」僕は観念してベッドにふたたびもぐった。「もう何年も見てねえよ。デジタル放送はじまってから」

艶菜はすらつと細い四肢をおしげもなくさらし、ベッドの端に座った。派手なロゴ入りのタンクトップを重ね着し、足の付け根までロールアップした短いジーンズにこついベルトを通して、チェーンをぶらさげている。そんなに変わらない年齢のはずなのに、ずいぶん大人びて見える。近づけられた顔の両端で、おおきなリングがつけられたピアスがそつと揺れる。テレビのニュースは少子高齢化社会の行く末を危惧するコメントを長々とつづけている。

「ね、君、ほんとに実際、どこから来たの。どっかから陸地に入ろうとして、船がひっくりかえってあんなっちゃったんでしょ」

僕は浜の岩場でぐったりとして倒れている自分の姿を想像し、恥ずかしくなった。顔をそらしながら「水無孤島」と言うと、そこから軽く三十秒は沈黙が流れた。艶菜はぽかんと口をひらき、ついでベッドを転げまわって笑った。

「うつそだあ」目尻に溶けたマスカラがにじんでいる。「あそこは隔離された離島なんだよ。あたし、お母さんから聞いたし、学校でも習ったよ。政府が手に負えない、上陸しようとするともれなく嵐で命を落とす地上最後の楽園なんだって」

「地上最後の楽園」と復唱してみるとその語感の気持ち悪さに啞然とする。

艶菜は勉強机の横の本棚から社会科公民の教科書を出して、最後のほうのページを僕に見せてくれた。いくつも蛍光ペンで線がひいてある文字の海の隅に、不鮮明な写真があった。上空から撮影された、海に浮かぶ島。その下にはちいさな字で「水無孤島の航空写真（上図）。現在は上陸禁止。写真は20××年のもの」と書かれてあった。鎖島化する以前のものだ。

本文に「水無孤島」という項目があり、僕の故郷が短い文章で解説されていた。水無孤島は自然に囲まれた離島であり、太古の昔から雨が降りつづいている不思議な島だと。独自の自然環境と珍種の植物が野生のまま残り、ふた昔前の日本の生活文化をそのままに人々が暮らしている貴重な離島であると。十八年前、東亜戦争の開戦

とほぼ同時期に特種のタカネノハナの出荷がはじまり、その後、スコールで上陸が不可能になったことも、すべて書かれてあった。

僕らがなんの感慨もなく普通に生活しているあの島のことを、すでにこの国の子供たちは教科書をつうじて勉強するようになっていく。母が語っていたことは事実だったが、実際目にとるとその図式があまりに不思議すぎて、僕は何も言えなかった。

「雨がやまないって本当なの」

「一応。馬鹿みたいにふってるよ」

「じゃあ、ずっと傘ばつかさしてるんだ。太陽が見えなきゃ空も見えない、一日中じめじめした状態ってことか。鬱陶しいね」

「もう慣れたよ」僕はため息をついた。

教科書を彼女にかえすと、眉間を指でおさえた。まだ頭痛がする。二リットルペットボトルのスポーツドリンクをすでに半分近く飲んでしまったというのに。艶菜はテレビのニュースをぼんやり見つめながら、「水無孤島ってさあ」と言った。

「なんかゲームの世界みたいな感覚だったなあ。実際にあるんだっていう実感がなくて、そんなとこに人が住んでるなんていまい想像できなくて。上陸も船出も不可能だなんて、現実にはありえないと思ってたし」

「でも」僕は毛布をにぎりしめた。「雨は毎日降ってるし、みんな普通に生活してる」

大陸の華国が周辺諸国を占領したというニュースを、無表情の美人キヤスターが淡々と伝える。立体的に見えるぶん、軍隊の行進がやたらとリアルだった。体育座りをする彼女のジーンズの裾から下着が少しだけ見えた。「いいんじゃない、肌が乾燥しないし」と艶菜がしれつと吐き捨てる。

「そんなにいいところじゃないよ。来れるようになったら来てみなよ。何も無い、雨ばかりで鬱陶しい」

「でもあたしたちにとって、少なからずちょっとした憧れの田舎な島って感覚だけだ」

「それが不思議」僕はため息をついた。「むしろ俺たちにとつたら、本土のが憧れ」

「あたしのお母さんはさ、昔、水無孤島に旅行で行ったことがあるんだって。そしたら現地の人はみんな優しくて、明るくて、森にかこまれて自然がいっぱい、雨ばかりだけどそのぶん空気がきれいだったって言ってた。だからあたしからしたら、水無孤島ってちょっと憧れる」

「だからなんで」

僕は問いかえした。艶菜がぶうつと頬をふくらませる。

「だってそうじゃない。ちよっとした田舎のささやかな暮らしって感じでさ。コンクリートがゆりかごだった都会育ちだと、どうしてもね。ましてあそこは地上最後の楽園。嵐にかこまれて上陸不可能って言われてるけど、そこに行きさえすればいろんな問題や悩みが解決しそうな気がするの」

「単純すぎるんじゃないか。あの島、そんなに靈驗あらたかなもんじゃない」

「そうでもないんじゃない。あたしが生まれる前の年ぐらいに、水無孤島周辺でスコールが発生して大量に船が転覆したつつって大騒ぎになったし、『鎖島』現象のトレンドと真ん中育ちなんだよね。

島が神格化されたのと同時期に青春をすごしてきたわけ。もう本土には人工栽培のものしか自然が残ってないし、都会はヒートアイランド絶好調。環境汚染も深刻。だから水無孤島上陸っていうそのものが、ある意味でのアイコンというか、夢に近いかも」

無邪気に笑う艶菜が不思議だった。彼女にとつての地上の楽園が。ふたたびポカリスウェットをラッパ飲みしていると、「そういえば」と艶菜が切りだした。

「隆くん、どうやって水無孤島を脱出してきたの。そもそも、なんで本土にむかって船なんか出したわけ」

そう、僕は中島さんのシェンロン熱を治すタカネノハナの特効薬を取りに来たんだ。脱水症状がおさまったらすぐにでもここを出た

い。

僕は状況をなるべく簡潔に説明した。中島さんが本土からの食べ物か何かを介してシエンロン熱にかかり、その特効薬を探しに来たと。タカネノハナが本土から無人ヘリで出荷されていることと、それがシエンロンウイルスに対応できる特効薬になることも、すでに日本国内では常識になっているらしい。島から船を出し、スコールをぬけたと思ったら大津波に襲われ、海に落ち、気がついたらここにいたことも説明すると、「それをあたしが拾ったわけか」と彼女が納得する。手のひらに拳をぽんと打ちつけた。

だが、艶菜はそのあと首を横に振った。

「確かにシエンロン熱は今もちろほら感染者がいるけどさ、その花から作られる薬は政府支給品で貴重だから、一部の大型病院でしか処方されていないの。しかも発症して入院してきた患者にだけ」

一応自宅療養のときにも服用するようにって、カプセルを持って帰る人もいるらしいけど。艶菜はそう言ってため息をついた。

テレビのニュースがシエンロンウイルスに感染した人数を告げる。それに便乗するように艶菜がシエンロン熱のことについて教えてくれた。二十年前の東亜戦争のとき、日本に上陸してきた華国兵がシエンロンウイルスを持ちこみ、先三年ほど爆発的に流行したこと。水無孤島に自生するタカネノハナの種子から新薬が作れることが分かり、大量に仕入れ、流通したことで死亡件数を激減させたこと。現在はタカネノハナの薬の効能がそうして証明され、早期発見、対処によって感染による死亡者は限りなくゼロに近くなり、国民の脅威となることはほぼなくなったらしい。

気がつけば毎年のインフルエンザみたいな扱いよ、と艶菜が言う。「ここはてっとり早く、事情を話しちゃえば。別にお役所仕事つつたつて人命ほつとくわけにやいかないでしょ。まして水無孤島から本土に上陸してきた男の子がいるとか、シエンロン熱が離島まで感染拡大なんてことになったら、それだけで騒がれるよ。そういう機関に問い合わせたら、ふた悶着ぐらいでなんとかなるんじゃない」

そう言つて艶菜は笑つた。

ベッドに轟沈し、ほっと一息つく。神がひきあわせた偶然だろうか。うまくいけばすぐにでも薬が手に入るかも知れない。そうなればあとは島に引きかえすだけだ。

そこまで考えてはたと思い当たる。

そもそも僕がどうやって本土に辿り着いたのかも分らない。波の中に竜を見たあのとき、確かに海に落ちた。そのときの背骨への衝撃も覚えている。そこから記憶がまったくない。気がつけば本土にいて、艶菜に介抱されていた。冷たい水の感触も、何も無い。脱出も上陸も不可能と思われていた水無孤島を、ちいさな漁船ひとつで飛びだしてきた自分の無鉄砲さには涙が出るが、あの津波にさらわれて生きている自分も不思議だった。

津波の中に見た竜を思い出す。青い瞳は透きとおっていて、何もかもを知っている賢者の色をしていた。あれがもし島の神だとも言うのなら、あまりにあっけなさすぎる。だけど自分が今ここで脱水症状でいどですんでいることを思えば、形をなさなかったおぼろげな幻の輪郭が、僕の中ではつきりと形成されてゆく、気がした。

救われなれないと思つていた。僕は島の伝説や神の存在を信奉していたわけじゃないから。

艶菜はじつと僕を見ていた。視線に耐えかねて「何」とたずねると、彼女は笑う。

「いや、なんかすごいなあつて」艶菜の口元はリップグロスで妖艶にかがやいていた。「その中島さんつていう駐在さん、別に隆人くんの身内つてわけじゃないんでしょ」

「でも、島民全員が幼なじみみたいなところだし」

「それでもさあ、あたしらは自分の恋人でもない人のために命かけて嵐の海に船だしたりしねえし。あれこれと綺麗事が蔓延してたつて、結局あたしら本土の人間は自分が好きな人のためなら他人が傷つこうと関係ない、ていうか見えなくなっちゃうし。それすら『誰を傷つけることになつてでも守りたい』なんていう口当たりのいい

言葉で包んじやってんだよ。自分と、自分の大事な人がしあわせならそれでいい。耳に甘い科白だけど、甘いから享受しちゃう」

そしてつづけた。「みんなは水無孤島のこと、神様に守られた島だつて言ってるけど、あたしはなんか違ってたな。水無孤島に行つたお母さんが言つてたよ。あの島はきつと、神様が数少ない心の優しい人間の魂をえらんで、あの島で、森の中でしあわせにすごさせてるんだつて。それはたぶん神様の傲慢なんだろうけど、だから本土の人間がタカネノハナを乱獲しはじめたとき、あの島は嵐にかこまれ箱庭になつたんだなつて」

テレビがにぎやかなバラエティ番組に変わり、にぎやかになる。

艶菜は何も言わなかった。僕もベッドに横たわったまま、何も言わなかった。真つ白な電灯の下、艶菜のむきだしの太股がやけになまめかしかった。彼女は吹きだすように笑つて、「やっぱりちよつと行つてみたいなあ」と言つた。

僕はうんと長いあいだ黙っていたけれど、やがて爪の先をいじりながら、「お祭りが」と言つた。

「あるんだ。天雨祭っていうんだけど、溜めた雨水を神様の涙つて呼んで、それを島の子供たちが手桶で島民に浴びせるんだ。太鼓鳴らして、舞を踊つて、無病息災と世界平和を願う。それぐらいなら、見せられるかも」

艶菜は悲しそうな目で僕を見て、そのあとへにやりと笑い、「見たい」と言つた。

となりの部屋で寝るという艶菜と数分口論し、結局僕が折れてこのままベッドで寝かせてもらうことにした。正直まだ頭痛がしたし、口の中はからからだったから、動かないでこのまま轟沈していたかった。僕は艶菜に救われたことを感謝すべきだと思った。この采配もすべて神の手によるものだとしたら、僕はやっぱりいつだって船を出すことができたんだと、今になって愕然とする。

荒れた海を前にして、最初の一步が踏み出せなかったただけなのだ。僕も、誰もが。

命を救ったお礼を、と言うと艶菜は爆笑した。よく笑う子だ。

「一宿の恩義とか、あたし、なんもしてねえつつの。もうちょっと世界が平和になってからにしなよ。あたしなんか、親にタンカ切って家出して好きな高校行ってる立場なんだよ。ぶっちゃけ人を救ってもお礼してもらおうってな性分じゃねえし。だからあたしとしては、誰もが誰かのために何かをしたいって無条件に思えるような、隆人くんみたいな人間がもうちょい増えたときに、またこっち戻ってきて、なんかしてよ」

そんなときにまた、ポカリでもおごるからさ。

そう言って艶菜はふらつく僕の肩を持ってベッドから起こし、窓辺に立たせた。「今できるのはこれぐらいかな」と言って彼女がブラインドをあけたとたん、僕はすべての呼吸を止めた。息ができなかった。

地上六階ほどの場所からのぞむ本土は、僕が想像していたような機械制御の近未来都市ではなかったが、それに近かった。よく写真で見えるような、雑居ビルとマンションとがひしめきあう、車の往来が激しい町、ではなかった。こういう構造になっているのか全面ガラス張りにしか見えないビルが立ち並び、それらがすべて住宅なのだと気づくのには数秒かった。歩行者は道路を悠然と歩いていたが、車は地上三階付近の空中をなめらかに走っていた。車線もきちんと分けられ、信号も宙に浮いている。点滅する光の線が中央分離帯の役割を果たしている。排気ガスの匂いは、しない。

夜闇に浮かぶ都市はまぶしく、昼のようにあかるい。だけど僕はすぐに町から視線をあげ、窓に顔をくっつけて、空を見あげた。

雨のふらない、よく晴れた夜空だった。

曇り空よりずっと深い紺色の闇の中、ところどころ星がまたたきヴェールのように宇宙をおおっている。その真ん中には金色の月がぽつんとひとつ、宝石を落としたようにかがやいていた。写真で見えたことがない夜空の月。風がとある、道。町ゆく人は傘なんてさしていなかった。僕はその場にへたりこんで、ただただひたす

らに月をみあげていた。水無孤島の天候の状況を知っている艶菜は、僕の反応もなかば予想できていたのか、僕の身体をささえて苦笑していた。

美しい夜の空に浮かぶ月は、城のようだった。

彼女はもう一度僕をベッドに横たえてくれた。窓とブラインドを閉めながら「とにかくゆっくり寝てな」と言つて、それ以上は何も訊かないでくれた。あかりが落とされ、部屋のドアが閉まると、僕は毛布を頭からかぶった。先刻見たばかりの星が、きらきらと音をたてて落ちてきそうな夜。雨音も雷鳴も聴こえない。だけど、故郷に残したミナや友人たちが、傘を持って遊んでいるようすが思い浮かんだ。

11 太陽

地上最後の楽園。

その言葉の気持ち悪さは最上級だったが、本土を勝手に近未来都市化していると想像して憧れていた僕も僕だと思った。

神様がえらんだ魂がああ島で暮らしている。その艶菜の言葉がラムネのように口の中ではじけて、溶けて、身体にしみこむ。冗句を盛りこんだフルコース。

この時期なら、布団に入った当初とはまったく違う寝相で蚊帳の中で目が覚めるのがいつもの朝だ。断じて煙草の脂で茶色くなりかけている白い壁紙に電灯、なんてことはなかった。だけどここが艶菜の部屋なのだとすぐに思いだす。地上の楽園って想像以上に重いとひとりごとすらつぶやいてしまう。重い。

両の手を目の前にかざし、何度かグーパーをくりかえす。血潮がすけて見える、自分の手。生命線短いなあ、と思いながら、ぼんやりとこれまでの経緯を思いだした。船出をした方がいいが波にのまれ、気がつけば本土の女子高生に拾われ、今、ここにいる。溶けかけた生クリームのように現実味のない天井が、ここは本土なんだぞ思い出せと僕を無言で叱責する。片手で目頭をおさえた。そうだ、今僕は本土にいるんだ。どろりと生クリームが耳に流れこんでくる。

時計は朝の八時半をさしていた。隣の部屋から艶菜の笑い声が聴こえた。ひとり暮らしのはずだから、おそらくまた電話をしているのだろう。彼女の手のひらにすっぽりおさまるサイズの 아이폰 は僕の知らないスタイルの携帯電話だった。僕が本で読んだ近未来都市に近い科学技術が、すでにこの列島に浸透している。目につくデスクトップパソコンもスリーディーテレビも、僕には非現実的でありながら、強い現実性をもって僕の思考を凌駕する。

やがて艶菜の声がとぎれ、ドアがひらいた。 아이폰 片手に「お、元気そうだね」と笑う彼女。昨日より露出度はひくいながら

に強めのファッション。学校に行かなくていいんだろつかという僕の思考を読んだのか「日曜だつつの」と艶菜が爆笑する。本当によく笑う子だ。

起きあがれるかと訊かれて上半身を起こし、ベッドの脇に立つ。多少ふらつくが軸はしっかりしているし、倒れることはない。そのとき初めて、自分の着ている服がまったく知らない男物のワイシャツとジーンズであることに気づいた。服をまじまじと見ていると「君の服は洗濯してる、それは前の彼氏のやつだから気にしないで」と言つて艶菜が煙草に火をつけた。僕が自力で立てるようになるまでと氣をつかせてしまったようだ。人を見た目で判断してはいけないと子供のころから言い聞かされてきたが、この派手な服装で煙草も吸うギャルが他人の僕を無償で介抱し、世話してくれたのだと思うとことさら身にしみる。

さらに艶菜が惣菜パンとポカリスエットのボトルが入ったコンビニの袋を投げてよこしたときは、「ありがとう」と三回も言った。艶菜は照れくさそうに笑い煙草を灰皿におしつけた。窓のブラインドがまだしまっていたので、室内は薄暗い。ベッドに腰かけてパンを食べながら、ブラインドの隙間からさしこむ太陽の光を見ていた。そういえば僕は、太陽を知らない。島は生まれたときから曇り空だし、たまに雲の隙間から光がさすことはあったけれど、あの白い光の塊を直接見ることはなかった。初日の出をおがまずとも新年は平等におとずれたし、島の植物はその環境に合わせて歴史上進化してきたから問題はなかった。ただどこか、太陽や青空に対する憧憬があり、写真でいくども見たけれどやはり、あたたかい光の粒をこの目で見てみたいという思いはあった。そのあやふやな輪郭の思いをこれまで無視してきたけれど、本土に上陸を果たしてみて急にやわらかいメレンゲがふくらむように自覚した。

そんなふうにパンのあき袋片手にぼんやりとブラインドの光を見ている僕の後頭部を、艶菜が指でちよいとつついた。もう頭はぐらつかないが、「何」とその手をはらった。

「昨日の星空であんだけびびってたんだから」彼女はさも面白そうに笑う。「今外に出たら腰ぬかすんじゃないの」

そう言いながら片手でアイフォーンを操作する。

——ああ、ルナ？　ちよつと車だしてくんない。いや、さっき言ってたシートがさあ。あ、違うこの場合はパズーか。わけありっぽいから手伝ってあげることにしたんだあ。とりまうちのマンションの前に車持ってきてよ。

僕は、ミナもあと五年たてばこれぐらいの年になるんだろうな、と思った。彼女の腰の曲線美をばんやりながめながら、ポカリスエットを一気飲みする。朝とは言えない時間帯になり、太陽の光がじよじよに部屋の気温をあげてゆく。その些末な変化すら、僕には一度立ち止まって宙をあおがせるほどの破壊力があつた。

——日本はもう死んでしまったのか？

「そんなことないし」艶菜がまた笑う。「確かにまわりの国にいろいろ抜かれちゃったし、学力低下っぷりも顕著すぎて胸張れねえけどさ、少なくともあたしは勉強してるよ」

「頭いいんだ」

「自慢じゃないけど学年トップは維持してる。あたし、世界遺産を研究したいんだ。クフ王のピラミッドとかナスカの地上絵とか、コロッセオとかね。人間なんてさ、地球のくそ長い時間からしたら瞬間的ポツと出のにわか支配者じゃん。そのにわか地球に残したものがなんなのか、見てみたいわけ。それは」

彼女は一息ついて言った。水無孤島も同じ。

心優しい人の魂を神様がえらんで、本土からとくはなれた水無孤島に閉じこめた。

昨日の彼女の言葉が呪縛のように、僕の自由をきかせなくする。艶菜は僕を部屋から連れだした。そういえば島を出たときに持っていたリュックやラジオはどうしたのだろうかと思つたが、手元ないことを見るとおそらく船と一緒にどこかで沈んでしまったのだと分かつた。リュックに大した貴重品は入っていなかったし、別に

かまわないのだが、本土に流れ着いたのが自分の身ひとつなのだと
思えばそれも不思議な感覚だった。

ぶんぶんまわっている洗濯機がでんと置かれた廊下をとおって、
玄関で靴をすすめられる。僕のはいていたスニーカーはドアの脇に
斜めに立てかけて干してあった。彼女のバスケシューズは少しちい
さかったので、行儀が悪いと分かっているが踵をつぶしてはいた。

ドアをあけると、思わず目をおおってしまった。マンションの通
路は東側を向いているので直接太陽の光が入っているわけではない
が、コンクリートで攻撃的に照りかえす光が僕の目をさす。空は青
く澄んでいて、一体どこまでつづいているのか見当もつかないほど
高い。海の青さとも、折り紙の水色とも違う。水分の足りていない
筆で絵の具を伸ばしたような雲がかかり、それも太陽の光を照りか
えして真っ白にかがやいていた。

写真で何度も見たはずの青空。だけど僕は、ドアから出たその体
制のまま、じっと真昼の宇宙をながめることを禁じえなかった。そ
うすべきだと僕の魂が芯から叫び、渴望していた何者かに指先をギ
リギリつかまれたような、緊迫した思いでそこに立っていた。

美しい、と。

艶菜が「ほら行くよ」とじれったそうに僕の手を引く。通路のい
ちばん端にあるエレベーターの上階行きのボタンを押す彼女に、「
地上におりるんじゃないのかい」とたずねた。

「公園デビューした赤ちゃんみたいにぽけらーっと空を見てる少年」
艶菜がしれっと答える。「そんなもん見せられたら、誰だってちょ
っと考えるでしょ」

六階にやってきたのは、ワイヤーで吊るされていないエレベータ
ーだった。内部は古い映画で見た宇宙船の狭い通路のように白く、
無機質で、逆におもちゃっぽくて、電気からめとられている気分
にさせる。艶菜が押したのは屋上のボタンだった。

地球の重力のなんたるかを忘れてしまうほど早く、ふわりとシャ
ボン玉が浮くようにエレベーターは僕らふたりを二十二階建てマン

シヨンの屋上へと運んだ。ひらかれたドアのあいだからゴウと強い風が吹いて、僕と艶菜の服や髪を乱した。屋上には貯水タンク以外何もなく、同じような高さのマンシオンやビルの屋上がいくつも見える。まるで飛び石のように。このまま飛んでしまえばほんぽんと建物から建物へジャンプしてゆけるんじゃないかと錯覚すらしてしまう。

二億人をゆうに超える人口の増加にともない狭まった居住地は、天に積みあげることと確保した。その結果、屋上という空間はさらに神の領域へ近くする。

——空は、あまりにも近かった。

さえぎるものが何もない青空。マンシオンの通路で見たときとは比べものにならない、フルパノラマの宇宙。このむこうには確かに他の惑星も月も太陽もあるのだと思いださせる、高く、高く、高い空。手を伸ばせば届いてしまうんじゃないかと思う低くにこった雨雲は、この空のどこにもない。首が痛くなるほど空を見あげて、そのまま片足を軸にくるりとゆるやかにまわった。雲が視界の端を丸くなくさるだけで、青さは何も変わらない。しらじらしさすら感じる高さ。無言の空。風をそのひろい胸ですべて受けとめてしまえる空。その青の中にぼろりとこぼれたような、光の惑星。

まだそんなに高くない位置で燦然とかがやき、世界を照らす。白くまぶしい太陽。空の青さにも風にもさえぎられない、すべての生命を見守る光。地球を目覚めさせるあたたかさ。この星を水の惑星たらしめている、誰も救わない神。

水無孤島に、神はいなかった。それは僕が船の上から確かに見た。船を出さなければ分からなかった。

太陽があまりにまぶしすぎて、僕は目をおおった。これまで薄暗い場所にいた人間が、急に明るい場所に出てもまぶしくて目をつぶしてしまうのだと、僕は思った。

くるり、くるりとまわりながら空を見ていて、やがて僕はバランスをくずしてうしろむきに倒れた。床に腰を打ちつける僕を見て艶

菜が笑う。「感動しすぎだっつ」と、目尻に涙を浮かべて。

太陽の熱であたためられたコンクリートにあおむけになって、大の字になって、僕は十五年間、何を見てきたのだろうと一瞬思った。けどすぐに頭をふって消去する。たとえ今この場で青空を見て、その高さに唖然となったとしても、僕にとつてはあのタールのような低い雨雲がこれまでの十五年間のすべてで、その下で育った自分の十五年間は否定されるべきではないと思ったからだ。僕たちは日本人で、艶菜も日本人で、ここは日本でそのことに間違いはなかったから。

僕は確信した。——日本の空は、こんなにも美しいのだと。土のにおい。葉擦れの音。降りつづく雨。胎動のような雷。純白の花。

ミナがタカネノハナを引きぬいた草のトンネル。雨も届かない茂みの中、僕は地面の湿っぽさと冷たさを感じながら、今みたいにあおむけに寝そべっていた。風のとおりみち。確かに同じ星の息吹を、僕は光の熱を浴びたばかりの肌で感じた。同じ風。水無孤島へとつづいている空を、雲が風に乘って旅してゆく。

だけど忘れてはいけない。今もあの島は雨が降っている。

僕は風にあおられながら、青い空とまぶしい太陽をあおいで、みともなく泣いた。隣にしゃがんだ艶菜にかまわず、泣いた。父さんは今どこにいるのだろう、と思った。僕はカメラを持っていないけど、今この瞬間でも水無孤島は雨が降っていて、太陽の光が一度もさしこまなくて、薄暗いままなのだということを思い出してしまえば、このまま太陽の光で目がやられても、僕はきっと僕を許せないと思った。

「艶菜！」

空気砲で撃たれたような音で我にかえった。派手なクラクションに耳をふさぎ、あたりを見わたすと、ちょうど屋上のフェンスのむこうに白塗りのセダンが見えた。僕は思わずまばたきをくりかえす。

地上走行用の車は水無孤島にも何台があるので珍しくないのだが、ここはマンションの屋上のはず。何がどうなつて、と内心パニックを起こしていると、フェンスのむこうにいたセダンがふわりと浮き、屋上に着地した。そんな馬鹿な。呆然とする僕を尻目に艶菜が「ルナ」と叫ぶ。

「ごめんごめん、ちょっと寄り道してた」

「ちよつとじゃねえし、てか屋上つて寄り道とか言わなくね？」

運転席から出てきたのは艶菜といい勝負の派手なギャルだった。

アクセサリーが歩いているようなその茶髪の少女は、僕を見てきよんとしたのち、にやりと笑う。

「ああ、その子が、艶菜が海で拾ったパズーってのは」

「そうそう。隆人くんっての。イケメンでしょ」

好き勝手に話をひろげる艶菜に背中を叩かれ、「こいつはルナ、あたしのクラスメイトで親友」と半ば強引に紹介された。ぺこりと頭をさげると「やつだ礼儀正しい」と笑われた。

運転席にふたたび乗りこんで、ルナが煙草に火をつけた。窓をあけて「乗りなよ」と言う。艶菜は笑っていた。

「事情は朝に艶菜から聞いたよ。君、友達助けるために荒波越えて本土まで来た水無孤島の住人なんだって」

「友達つていうか」僕は声をはりあげた。「家族も同然です」

「いいね、そういうのって。正義感とかそんな陳腐な言葉も、逆にくつつけないほうがいいね。君みたいな子、あたしは好きだよ。シエンロンが今の水無孤島に広まったってというのは、苦々しいニユースだけど」

艶菜に背中を押され、僕はルナの車の後部座席に乗りこんだ。つづいて助手席に艶菜が入る。エンジンがかかり、エレベーターに似た浮遊感と共に視界が上昇した。

「あんた、こんなとこまで浮上して、誰かに見つからなかった？」

「平気平気。そこの路地裏から下降したら、ばれないって」

どうやらこの高さまで車を持ち上げることは違反らしい。僕はシ

ートベルトをしめた。

中島さんのことを思い出した。こうしている間にも、彼の命はけずられている。出港直前の彼の表情は赤く火照り、苦しげに呼吸をしていた。あれからもう何十時間も経過してしまっている。手遅れにだけは、させたくない。

「とりあえずさ」ルナが車をマンションとなりの同じようなマンションのあいだにすべらせながら、バックミラー越しに言う。「しかるべき処置はNIIIDの大阪支部に直訴することからはじまるね。ちんたら電話なんかしてたらまともに対応してくれないから、水無孤島で住民登録してる隆人くんが直接行ったら説得力あるよ」

「NIIIDって」

「国立感染症研究所」艶菜が助手席から言い放つ。

地上付近までゆるやかに降下した車は、上空十メートル付近を規則正しく走っている車の流れからさらに一段上を、時速百三十キロ以上のスピードで走りだした。どうやらここが有料の高速道路になるらしい。運転席のスリーディーのタッチパネルで、アイフォーンをかざして精算するルナを後部座席から見ている。周囲の建物も、立体映像の方面表示板も猛スピードでうしろに流れてゆく。僕はそれらをながめながら両腕をかき抱いた。

中島さん、千晴さん、裕介くん、利香、和明、母さん、ミナ。

脳裏に愛する人々の笑顔が浮かんでは、水の中に溶かした砂糖のようにほろろと消えてゆく。その残像を噛みしめながら、僕は本を読んで想像していた近未来都市が窓の外でめまぐるしく変化してゆくのを、ここに来るために船に飛び乗ったときと同じ気持ちで見ている。僕は今、ここにいて、確かにここで生きている。冷たい海をただよいながら、長い長い夢を見ているわけではないのだとしたら、何ができるだろうか、なんて考えている暇はない。できることをするだけだ。

ルナが音楽をかけ、何かのスイッチを入れると同時に、車の天井が一瞬で消えた。嘘だろと息を飲んだが、手を伸ばせば確かに金属

質なものに触れることができたので、透明化しただけなのだと分かった。バラバラと流れてゆくビルの先端に撫でられるように、動かない青空。さしこむ太陽の光。それを見あげているうちに、僕は思った。どうか、この国の行く末が、僕たちの願い祈るものにできるかぎり近いものであるようにと。

僕はずっと水無孤島にいた。だけど僕は大日本共和国の国民で、同じ空の下で誰しもと共に生きていた。

「隆人くんはさ」

助手席から身をのりだす艶菜。「葉が手に入っても、そのあとどうやって水無孤島に帰るつもりなの。昨日みたいに、波にさらわれて偶然流れ着きましたなんていう奇跡、そうそうあったもんじゃないと思うけど」

いちばんいいのは、今ごろ本土と水無孤島との水路がもとどおり安泰になってるってことなんだけど。そんな艶菜のつぶやきに僕は「大丈夫」とこたえた。

大丈夫。僕は、あの島に帰れるんだ。

奇跡のような青空を見あげて、僕はそっと目を閉じた。

<了>

あとがき

遅ればせながら、あけましておめでとうございます。アイです。

成人式でポツと思いついたネタを短期間で一気に書くという暴挙に出ました（笑）。

児童文学っぽいものを意識していたのですが、小学校高学年や中学生が読むにはちと難解すぎたんじゃないかと後悔……。

数学の最低点が8点、理科が12点という根っからの文系人間がほぼ初めて長編でファンタジーものに挑みました。

ファンタジーつつたら本気でファンタジー書いてる人にジャンピング土下座しなきゃいけない内容ですが。

そういう理科の基礎知識が根本的にうつすーい奴が書いたので、色々と荒が目立つと思われませんが自分で気づかないくらい理科弱いのですルーしてやってください。ほんと絶対今後ファンタジー書きたくない（泣）。

理科といえば自分が好きな分野しか真面目に授業聞いてなかったぜ、やっぱり学校の勉強って必要だぜ……と痛感して怒涛の涙を流して足元すすいだバカ1号です。

これを見た友人が

「あんたギャルゲーのやりすぎ」

って言うてましたが……で、でしょうねえ（汗）

私は基本的に純文学を愛する芥川オタクですがサブカル路線ではギャルゲーを愛する人間なので、普通に書いてるつもりがそうだったというか……って言い訳になってない……。

お兄ちゃん大好きーな妹キャラとかただ俺得なんだと（笑）。

「兄ラブな妹、強気な幼なじみ、美人な人妻、ギャルな女子高生がいつぱんに出てくる児童文学はオカシイ」

って言われてしまいました……orz
もはや私がお兄ちゃんラブなかわいい妹キャラを書きたいがためのものに……。

戯言はこのへんで……（汗）。

「雨のやまない島の話を書こう」と成人式のときに思いつき、そこからむくむくと話がふくらんできて結果的にこーなりました。最初に思いついたのがラストシーン（青空と太陽を初めて見て涙する主人公）だったので、時系列的には逆流していった形になります。

前述のとおり理科と数学が赤点すれすれで高校を卒業したバカ1号なので、調べなきゃいけないことが多くてある意味めちゃくちゃ労力使いました。もう絶対ファンタジー書かな（以下略
自分でも色々納得いかないところがあり、今後の課題です。

こんなふうに「うまくいかない！」ってなっても「でもどこがうまくいってないのか分からない！」よりはずっとマシなんじゃないかと前向きにとらえてます、ハイ。

とにかく色んなテーマと愛情だけはたっぷり込めて書きました。私自身、コンプレックスの多い人間で「こんな自分なんか」って思うことが多々あるのですが、人様からの意見を聴けば色々いい部分も見つかったりして「そういうもんかな」って思うのです。

逆にすごいと思ってた人が、実は自分と同じように色んな葛藤と闘ってる人だったり、実は逃げたことがある人だったりして。

作中の中島さんが「俺の背中なんか見なくていい。自分のえらんだ道に誇りを持って、間違っても自分を否定しないで軌道修正していけるような人間になってくれれば」って言ってましたが、それはまるまる自分への叱咤激励にしています（自分で・笑）。

できれば人のせいにしないで生きていきたいものです。

隆人だって実は島から出られない苛立ちよりも、何かにつけて本土

に責任転嫁をする自分を毛嫌いしていたんじゃないかなーと思えば、自分と正反対の人間に見えてちよつと親近感あるやつだと思えたり。

そんなふうに、愛だけはたくさんある、個人的には愛着のある話でした。

あえて優しい人たちがばかり書きましたが（そういう島だし）、みんな大好きです。特に中島さん（笑）。

小説としてのレベルを問われればおそらく（ファンタジーとしてしまえば）修行が足りないひとつだと思います。

修練が足りず、読んで下さった皆様のお目汚しになっではないかとビクビクしております。

欠点のいくつかは自覚しておりますので、また修行を積みここに作品を公開できるよう鍛錬するのみです。

感想・批判・批評・指摘・説教、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0546q/>

ビューティフル・ナイト

2011年1月24日22時11分発行